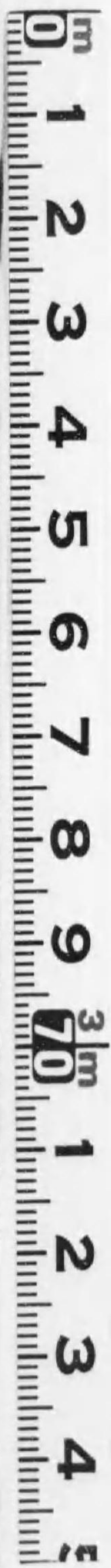
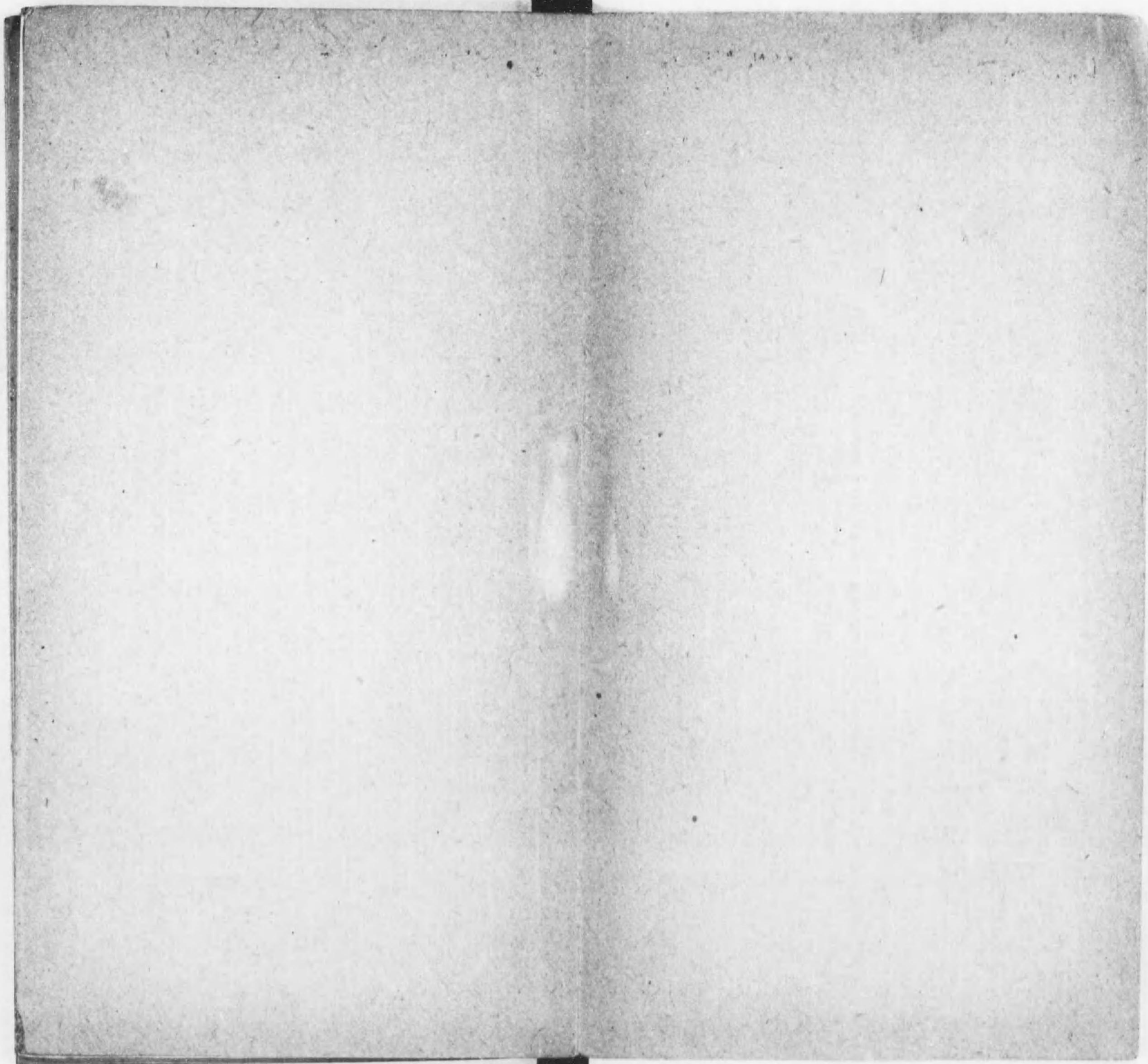


始





持109

946



人情

百

話



大正

3. 6. 13

内交

自序

朝夕感じたる事及び今日迄讀み終へたる書中にて今に尙其の記憶に新たなるものを集めて常識修練人情百話と題す、かくさすに云へば實は己れの學問にはあらずして先人の學問也、先人の思想也、只其の語を代へ其の容ちを變じ聊かこれを新たに料理したるに過ぎず故に其功の如きは心に求めず只少しきにても人心に響く所あれば以て自ら足れりとなす讀者深くなこれを答め給ひそ。

大正三年五月中旬

著者識す

常識
修練
人情百話目次

一、榮轉の語……………一
 二、禮の意義……………一
 三、娘の望み……………二
 四、娘の分別……………二
 五、花にも飽く……………三
 六、重成の妻……………四
 七、榮華は夢……………五
 八、元忠の横取り……………五
 九、楠正成曰く……………六
 一〇、勞せずして得るもの……………六
 一一、一方は苦し……………七
 一二、禽鳥も欣々……………七

一三、美人……………八
 一四、忘る可きを忘れず……………八
 一五、人の常……………九
 一六、捨て、置け……………九
 一七、是れ道の極……………一〇
 一八、捨てずに置けば……………一〇
 一九、輕信輕疑……………一〇
 二〇、王公と乞食……………一一
 二一、偉人は常……………一一
 二二、正行と内侍……………一二
 二三、山と水……………一三
 二四、色慾……………一四
 二五、親心……………一四
 二六、怨みは必ず報ゆ……………一五

二七、水にあらず山にあらず……………二五
 二八、恐れて謹め……………二六
 二九、劍の上を歩む……………二六
 三〇、愛嬌の徳……………二六
 三一、私は泣いた……………二七
 三二、才不才の間……………二八
 三三、山陽の知行合……………二八
 三四、富と徳……………二九
 三五、道心必ず生ず……………二九
 三六、出過ぎぬ様……………二〇
 三七、大丈夫……………二〇
 三八、顔見て惚れる……………二二
 三九、眉の曰く……………二二
 四〇、奇言と奇行……………三三

四一、クソ虫同様……………三三
 四二、本性はかくされぬ……………三三
 四三、己れを計りて人を計らず……………三四
 四四、わが身の悲しさ……………三五
 四五、頼み難きは我が心……………三六
 四六、闇から闇……………二七
 四七、云わぬが勝ち……………二七
 四八、無窮の受用あり……………二八
 四九、信玄の家訓……………二八
 五〇、致知の工夫……………二九
 五一、心しだい……………三〇
 五二、恃もしい女……………三〇
 五三、雀と鶯と時鳥……………三一
 五四、口は利巧……………三一

五一、死にたくな……………三三
 五二、無愛想は利己的……………三三
 五三、蘆の葉にも……………三三
 五四、良心にも皮あり……………三三
 五五、心に於て着々……………三四
 五六、四種の受法……………三四
 五七、親は子の爲に隠す……………三五
 五八、自ら美とす……………三五
 五九、失戀の男女……………三六
 六〇、夢に逃げまわる……………三六
 六一、冗語の中に……………三七
 六二、多惡を招致す……………三七
 六三、英雄の心事……………三八
 六四、お前の着物は短……………三八

六五、一見直ちに親しむ……………三九
 七〇、時宗の臆病……………三九
 七一、ウンと加法を行ふ……………四〇
 七二、事は密を以て成る……………四〇
 七三、際限なき苦海……………四一
 七四、偽りと思ひながらも……………四一
 七五、長壽の秘訣……………四二
 七六、大人の生涯……………四二
 七七、人をのみ渡し渡して……………四三
 七八、枯るゝも同じ……………四四
 七九、人や眞に智也……………四五
 八〇、世の中は六つかし……………四五
 八一、情理合せ至る……………四六
 八二、よく言へり……………四六

八三、勝手な話し……………四六
 八四、自然の教訓……………四七
 八五、蟬の妻……………四八
 八六、情は自然にまかせよ……………四九
 八七、飯と掛物……………四九
 八八、経験以外に思ひ遣る……………五〇
 八九、掛け直あり……………五〇
 九〇、表面の尊敬……………五一
 九一、神様になるな……………五二
 九二、見ずに云ふな……………五二
 九三、形氣を以て事を用ふ……………五三
 九四、個人的で社會的……………五三
 九五、雲泥の差……………五四
 九六、金と臆……………五五

九七、大盜の四徳……………五五
 九八、浮世の常……………五六
 九九、星様は若い……………五六
 一〇〇、片びいき……………五七
 一〇一、心和氣平……………五八
 一〇二、子も親を思ふ……………五八
 一〇三、明すまいぞや……………五九
 一〇四、他の方寸……………五九
 一〇五、どうした者か……………六〇
 一〇六、禮を知れ……………六〇
 一〇七、吾人の心境……………六一
 一〇八、心情の爽快……………六一
 一〇九、着物に表わる……………六二
 一一〇、不平家の常……………六三

一一一、余は馬鹿……………六三
 一一二、只金あるのみ……………六四
 一一三、達と寛……………六四
 一一四、花は花……………六五
 一一五、温和外に表はれて……………六五
 一一六、弱さに同情……………六六
 一一六、一仰一俯……………六六
 一一八、問ひ詰むるな……………六七
 一一九、有徳者は熟睡す……………六七
 一二〇、六容……………六八
 一二一、御用心……………六八
 一二三、幅をかく……………六九
 一二三、親類には欲しくはない……………六九
 一二四、男女の間……………七〇

一二五、實は借金……………七一
 一二六、樂翁公書齋の銘……………七一
 一二七、山陽の眞摯……………七二
 一二八、恐ろしきは誤解……………七二
 一二九、心體は天體……………七二
 一三〇、未だ……………七三
 一三一、可愛さ餘つて……………七三
 一三三、古人の糟粕……………七四
 一三三、云はぬが勝ち……………七五
 一三四、人を釣る法……………七五
 一三五、徳は智也……………七六
 一三六、楊震の四知……………七七
 一三七、只恕あるのみ……………七七
 一三八、化け比べ……………七八

一六七、下葉は青し……………九二
 一六八、斯かる人に注意……………九三
 一六九、得たりがほ……………九三
 一七〇、餘年幾何もなし……………九四
 一七一、おかしき心……………九四
 一七二、辯は黙に如かず……………九五
 一七三、私の強き人……………九五
 一七四、自らめりこむ……………九六
 一七五、出た……………九七
 一七六、即時斷行……………九七
 一七七、むつかしい所……………九八
 一七八、口と心は他人……………九八
 一七九、自ら選べ……………九九
 一八〇、娘に似たり……………九九

一八一、善は善惡は惡……………一〇〇
 一八二、心の衛生……………一〇〇
 一八三、性質の表徴……………一〇〇
 一八四、成功の堂……………一〇一
 一八五、治心修心……………一〇一
 一八六、五指即一手……………一〇二
 一八七、遂には表はる……………一〇二
 一八八、眞の文學者……………一〇三
 一八九、家康の用意……………一〇三
 一九〇、敬遠……………一〇四
 一九一、あの人は……………一〇五
 一九二、其の徳全し……………一〇五
 一九三、大怪物……………一〇五
 一九四、思ひ切れ……………一〇六

一三九、必ず和す……………七六
 一四〇、互に示す……………七六
 一四一、大小高下……………七九
 一四二、ズンと飛べ……………七九
 一四三、教へ難し……………八〇
 一四四、慢心の致す所……………八〇
 一四五、物體ぶる奴……………八一
 一四六、雨が横に降る……………八一
 一四七、矢張り豪い……………八二
 一四八、一寸先きは闇……………八二
 一四九、衆異と眞理……………八三
 一五〇、味ある言……………八三
 一五一、獨り立ち……………八四
 一五二、言輕ければ……………八四

一五三、片隅に押し込む……………八五
 一五四、自我實現と治善……………八五
 一五五、少しきの腕……………八六
 一五六、吾人の通弊……………八六
 一五七、腕のなき奴……………八七
 一五八、よく善言を聞け……………八七
 一五九、意識ある誇張……………八七
 一六〇、私も其通り……………八八
 一六一、青年の通弊……………八八
 一六二、あら恐し……………八九
 一六三、馳走が少ない……………九〇
 一六四、己れは豪い……………九〇
 一六五、當り前……………九一
 一六六、善根は植へ難し……………九一

一九五、静観……………一〇七
 一九六、廣き世界……………一〇七
 一九七、記者に望む……………一〇七
 一九八、獨身……………一〇八
 一九九、己れの才……………一〇九
 二〇〇、分は常なし……………一〇九
 二〇一、吳臨川曰く……………一〇九
 二〇二、道の歩き方……………一一〇
 二〇三、稻の花……………一一〇
 二〇四、人で暮せ……………一一一
 二〇五、親和の至り……………一一一
 二〇六、精誠の至り……………一一二
 二〇七、人生最も苦しみ所……………一一二
 二〇八、愚の極……………一一三

二〇九、天地の大……………一一三
 二一〇、蒔柿を見よ……………一一三
 二一一、學を銜ふ……………一一四
 二一二、自適……………一一四
 二一三、死後に彰はる……………一一五
 二一四、短氣は損器……………一一五
 二一五、水なる哉……………一一五
 二一六、金言より實行……………一一六
 二一七、賀狀天外より來る……………一一六
 二一八、世の中は芝居あり……………一一七
 二一九、大きな傘……………一一七
 二二〇、私の好き嫌ひ……………一一八
 △車屋さん……………一一八
 △奥さん……………一一九

△書生さん……………一二〇
 △食べ物……………一二〇
 △女學生さん……………一二一
 △下女どん……………一二三
 △花と鳥……………一二三
 三二、涼み日記の一節……………一二三
 △蟬……………一二三
 △時鳥……………一二三
 △朝顔……………一二三
 △蚊……………一二四
 三三、男も悪いが女も悪い……………一二四
 三三、春心……………一二六
 三四、歳晚小品……………一二七
 三五、東京漫録……………一二九

二二六、東都警察官練習所にあ
 る友人に送る文……………一二七
 二二七、母に代りて東京の女學
 生に與ふるの書……………一二五
 二二八、昔興雅記……………一二六
 二二九、新卒業の教習生に與ふ
 最終の希望……………一二五

人情百話目次 終

常識
修練

人情百話

日本警察新聞社編纂

一、榮轉の語

或人曰く轉すれば必ず榮轉の辭を以てす警察の所在地に何なる高下あらん義に乙署に轉じ今復た甲署に戻らば如何無意味なる哉榮轉の語と予理論上然るべきを信ず然れども此語を用ゆるも敢て不可なるに非ず理窟を離れたる處にも禮あり誰れか文末百拜の辭を見て事實なりと信ずる者あらんや榮轉の語は禮也

二、禮の意義

予嘗て電車混雑中に一老女に其席を譲る老女慇懃懇切叩頭百拜す予衷心聊か快感を覺ゆ而して道に兒供の躓き倒れしを見即ち之を抱き起し砂を掃ふて大に勞はる母出で來り撫然として其子

を連れ去り行く予が心事平ならざりき是れ一座席を譲り一小兒を起たしめて禮を受けんとする予の眞意に非らざるも一老女一母婦の此動作が妙に心に感ずるもの也

三、娘の望み

良家に一娘あり常に婿を撰べど娘の氣に入りしものなし然るに一夕娘は突然兩親に婿を求めんことを要請す兩親狂喜して其何人なるやを問ふ娘微笑み答て曰く近村某駐在巡查某也と兩親亦た其何故なるやを問ふ答て曰く警官は國民保護の職にてあれば妻たる妾の身は更に保護し鐘愛し給ふは言はずもの事妾は如何にも警官の妻たらんと兩親大に喜び縁談忽ち纏まり暖なる家庭に樂しき日を送りつゝありと

四、娘の分別

さる家に美しき娘ありしが或日二人の縁談申込みし者あり然るに二人の内一人の男は顔は美しけれども家貧しく又他の一人は家は裕かなれども顔至つて醜くし、所謂玉に瑕にて何れも各々其一方を缺けり、是に於て母はしばし躊躇ひてありしが、ここぞ娘の分別時と思ひ定めて娘を呼び斯くと語りて、其決心を促したるに娘の曰く「お母さん私は晝は金持の内に行き、夜は好い男の方に参ります」

五、花にも飽く

久しきは花にも人の飽くぞとて

心早くも散る櫻かな

さても〜時を得たる者かな、人は三日見ぬ間の櫻かなと悲め

ども吾れは却つて其時を得たるを喜ぶ者なり
あゝ飽き易き人心、飽かれぬ先きに散れ櫻、飽かれぬ先きに散れ紅葉。

いざさらば思ひ立田の薄紅葉
人の心に飽きの來ぬ間に

六、重成の妻

一樹の蔭、一河の流れ是れ他生の縁と承り候にこそ、そもおとせの頃よりして偕老の枕をなして只影の形ちに添ふ如く思ひまゐらせ且つ思はれまゐらせ候、此の頃承り候へば此の世限りの御催しの由かげながら嬉れしくまゐらせ候、楚の項王とやらんは世に猛き武夫なれども虞氏の爲めに名残りを惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別れを嘆くとやら、去れば世に望みの窮りたる

妾が身にてせめては身の存生中に最後を遂げ、死出の道とやらんにて待ち上げ奉り候必ず、秀頼公多年海山の御恩御忘却なき様ねがひ上げまゐらせ候、あらあらめでたくかして。重成の妻は矢張り重成の妻なり、其やさしくして雄々しき所とても今時の婦人には得て望むべからず、思へば重成の勇其一半は妻の賜なりし也。

七、榮華は夢

ほむる間もほめらるる間も花火哉
櫻は春に飾れども三日の後に憂ひあり、紅葉は秋に飾れども時雨に散り行く哀れあり、これを思ひ彼れを思へば四時花咲かで静なる柳こそ真にわが心には匂へ。

八、元忠の横取り

家康も元忠も面白き男かな、家康織田信長と武田氏を亡し馬場信房の女の美なるを聞き元忠を遣りて其女を收め來らしむ然るに元忠自ら取りて家康に奉らず家康もおかしかりしにや又是れを咎めず、己れの心を推して元忠の心を思ひ遣りしにや。

九、楠正成曰く

小督の局云へり、言語奇を好むは其人の不正なるを示すもの也人の言は常ならん事を要す苟も其奇なるを欲せずと又楠正成は曰く珍事には誠少くなしと。

一〇、勞せずして得るもの

或人問ふて曰く世に勞せずして得るものありやと答へて曰く貧即ち是れなりと又問ふて曰く世の中に古くしてよきものありやと其人答へて曰く酒と友は古き程よしと。

一一、一方は苦し

勝負事は必ず自ら求めて爲すべからず、己れ勝てば人苦しき也、人の嬉しき時には己れ又苦しき也。

勝負事は總て戦争也、殺しては樂しみ殺されては又悲む、故に古の人勝負事を戒めて曰く

巧を以て力を闘すものは始め陽に始り常に陰に終る甚だ至れば即ち奇巧多しと。

一二、禽鳥も欣々

古語に云へるあり、天地の氣暖かなれば即ち生じ寒ければ即ち殺す、故に性氣清冷なるものは其の受享も又薄也只和氣熱心の人は其福亦深く其澤又長しと又曰く疾風怒雨には禽鳥も戚々たり齊月光風には禽鳥も欣々たり見るべし天地一日も和氣なかる

べからず人心一日も喜神なかるべからずと。

一三、八方美人

眞骨頭あるものは時流に媚びず、世俗を迎へず自信を以て事に當り斷々乎として思ふ所を行ひ其云はんと欲する所を云ふ、只金と名譽のほしきもの常に八方美人となりて四方に轉び時流に媚び世俗を迎へんと欲す、咄々八方美人夫れ國の爲めに何んする者ぞや。

一四、忘るべきを忘れず

人の過誤は責め己れの過はこれを顧みず、即ち其恕すべきを恕せずして其恕すべからざるものを恕す、又人の悪行は忘れずして己れの悪行は忽ち忘る、即ち其の忘るべきを忘れずして其忘るべからざる者を忘る禍の集り來る所以也。

人は皆前に目がつき後には

耳が屏風をたてまはしけり

一五、人の常

老子曰く、飢ゆれば附き、飽けば即ちあがり、あたたかなれば則ち趨り、寒ければ棄つ、人情の通患なりと。

一六、捨てて置け

浮世は斯うしたものと諦めて善きも悪しきも鏡なりけりと、思ひ過すこと此上の徳はなし、是れ又一是非、彼又一是非、とは哲人の教ふる所、斯く思ひ來れば世の中の事を一々是非して咎めたくはなし。

善きも悪しきも一つに丸め

紙に包んで捨てて置け

一七、是れ道の極

人に對しては和にして寛己れに對しては恭かつ嚴下に對しては慈にして愛、友に接しては忠信即ち對す斯くの如くなれば人を失はず已れを損せず下の怨みを買はず友の信を失はずと至言也

一八、捨てずに置けば
落ちた木の實を捨てずに置けば

何時か芽の出る時が来る

人も一度位落ちたりとて直ちに殺すべからず、すべからく起して助け置くべし春來なば花咲く事もあらん悔めて悟らば香ひを放つ事もありなん一度二度の過は神さへ免れ難きものなるぞ。

一九、輕信輕疑

友は失ふて始めて其眞價を知り、松柏は後れ凋みて始めて其操

あらはる、人は初對面ほどよくはなく、又七度疑ふ程わるくはなし只慎むべきは輕信輕疑即ち是れのみ

二〇、王公と乞食

釋迦一度摩迦陀國に至るや國王太子の大才を愛して之を止めんと欲し國を裂いて太子に與へんと欲す太子答へて曰く一度世の權力に走らば百憂は直ちに來りて其人を懊惱の中に投せんと且つ又曰く死せる王公と死せる乞食と何の撰ぶ所かあると

二一、偉人は常

或人偉人を訪ひ歸り來りて曰く朝夕の座作進退には何處にも偉なる所は存せずと思ふに其偉ならざるが即ち偉也偉人は常を失はず又奇行を求めず然るに小人却つて偉ならんと欲して好んで奇言奇行を演ずニセ偉人にあらずして何ぞ、古語によく俗を脱

するものは即ち偉也作意に奇を尙ぶものは偉となさずして奇となすと。

二二二、正行と内侍

とても世にながらふべくもあらぬ身の

高野武藏の守師直辨の内侍を見染め家來を遣はし、奸計を以て是れを奪ひ來らしむ、正行吉野參宮の道に是れと遇ひ即ち助けて家に歸らしむ。
内侍は俊基の娘也、才ありて顔容いとめでたく所謂才色兼備の女なりし也、其後天皇内侍を正行に賜はんとせし時内侍の心や如何なりけん、内侍も命の恩人なれば定めて否とは思はざりしならん否却つて正行の優しき心に思ひを寄せしやも知るべから

ず、然るに正行はそを辭し奉れり、哀れなるは内侍の心也、げに氣高きは正行の心なりけり。
ひざんや正平四年正行四條畷の戰に死を遂ぐるや内侍は緑の黒髪フツト斷ち切りて正行の菩提を吊ひぬ、あなあはれ。

二二三、山と水

余や山水を愛す、山を愛するは靜かなるが爲也、水を愛するは動くが爲也、山や高うして足を低きに置き水や高さより湧いて而かも低ふ流る、山や時に鳴動して地を動かし水や時に大波を起して天を蹴る、山や雨風に遇へば却つて其青さを増し、水や物に遇へば忽ち形を變じて流下す、又山が天を衝いて其高さを示せば水は海となりて其廣さを示し互に相對して而かも争はず、二つながら以て天地の大を爲す。

二四、色慾
古人云へり、色慾火の如く熾なるも一念病に及べば便ち興寒灰に似たり、名利飴の如く甘きも而かも一念死地に想到すれば便ち味嚼蠟の如し故に人常に死を憂ひ病を慮らば亦幻業を消し而して道心を長ずべしと。

二五、親心

父は歩いて行けと云ひ母は車より行けと云ふ、父の言や智より出で、母の言や愛より出づ反對の言なれども子を思ふの情は何れもかはる事なし、眞に有り難きは父母の恩愛なり、靜縁法師の歌に

先き立たん事をうしとぞ思ひしに
後れても又かなしかりけり

二六、怨みは必ず報ゆ
語るなと人に語れば其人も
又語るなと、語る世の中

人の惡事に對する人情云ひ得て切なり、古語に、「人の恩を受くる深しと雖も報いず、怨みは即ち淺きも又報ゆ、人の惡を聞く隠ると雖も疑はず、善は即ち顯はるるも亦これを疑ふ」と吾人夫れ心せずして可ならんや。

二七、水にあらず山にあらず

世の中の事を猿にかこつけて、見ざると云ひ聞かざると云ひ又は、かかはらざるをまさるなりけりと歌ふ皆是れ人情の轉變極りなきを慮つての云ひ草なり、思へば思はざるがよく交じらざるが肝要にしてかかはざるが知者と云ふべし、白居易が

「行路之難は水にあらざ山にあらざ、只人情反覆之間にあり」とは眞に夫れ味ある言ならずや。

二八、恐れて謹め

譽むるものよく其實を過すは情熱すれば也、誹るもの又よく其眞を誤るは情冷かなれば也、多く静は熱に勝ち、熱は又よく吾が身を燒盡す夫れ恐れて謹まざるべけんや。

二九、劍の上を歩む

負けて憤り憤りて害心を起す人情也、故に人は時に恥をさらして徳をとり一步を譲りて徳を養ふの要あり何時も勝氣一ぺんにて遣り通すは恰も劍の上を歩むが如し。

三〇、愛嬌の徳

智なくとも愛嬌あれば人近づき藝なくともしほらしければ人こ

れを愛す、才を愛せずして顔を愛するは人情也、故に女は髪もめでたく着物の色合にも注意せざるべからず、殊更に飾れとはあらねども袴も青黒よりは海老茶がにぎやかなり殊にしほらしき女の海老茶つけたるはこよなく慕はし。

三一、私は泣いた

深く人を頼む事なかれ、浅く人を見る事なかれ、深く人を頼めば失望する事多く、浅く人を見れば過つ事多し。吾れ度々深く人を頼みて失望せし事多く、浅く人を見て誠を語り泣いて悔いたる事多し、思へば深きが如くにし、浅きは人心也、浅きが如くにして深きも又人心也。

沈々不語の士に遇はば且く心を輸す勿れ、悻々自ら好するの人

を見れば將に須く口を防ぐべし

三三二、才不才の間

自ら功を求めず過ちなきを以て功となし常に才不才の間に居るべき也とは古聖賢の戒むる所也。昔混沌と云ふ者あり目なく鼻なく、耳口元より備はらず或人之れを哀れみ口耳鼻目を開き與へしに忽ち絶命せりと云ふ、才を振りまく事の危険なるを戒めし也。

三三三、山陽の知行合一

「頼山陽の日本外史を著すや友に伴はれて易行院に至り史稿を法海に示す、法海時に書を読む友の山陽を介するや法海徐ろに口を開いて曰く、聞く久太郎なる者京にあつて酒を飲み其母を顧みず而して忠臣楠氏の傳をもつ、今不孝人にして忠臣を傳

す楠氏知るあらば必ず之を屑とせざらん、余も亦この不孝人を見る事を好まずと、又書を読む事始めの如し、山陽大に恥ぢ出でて曰く眞に一宗の學頭也と、友曰く知行合一夫れ今の時にあらざるなきかと、山陽即ち行李を整へ愴惶郷に歸りて母を省す。

三四、富と徳

富は徳によりて得、徳によりて保ち、徳によりて益々光を發す、徳によりて得たる富にあらざれば尊からざる也、徳によりて保つ富にあらざれば其産も又恒なき也、然るに世には徳を去つて只富のみ求めんと欲する人あり眞に夫れ危ふからずや。

三五、道心必ず生ず

病にあへば名利を忘れ一念死地に想到すれば自ら道心生ず、誰れも病時にはよく仁者となり死際には又よく慈善事業に金を投

ず、此處に於てか宗教に於ては病時を以て發菩提心の好因縁となし聞法省察の好時機となす、悟れ世の人釋迦の教理に此の念多き因由を。

三六、出過ぎぬ様

諸事遠慮致し随分〜出過ぎぬ様又利巧がましく問はず語りなどして多く物云ふまじき事。

平凡なれども意味深長也、すべて世の中は遠慮ある人に福來り高慢なる人に禍集る、いつもひかへ目にして人近く言葉すくなくして慈善あれば人の尊敬を受くる事うたがひなし。

三七、大丈夫

孟子曰く天下の廣居に居り天下の正位に立ち天下の大道を行ふ、志を得れば民と與に之に由り志を得ざれば獨り其道を行ふ、

富貴も淫する能はず、貧賤も移すあたはず、威武も屈する能はず之れを大丈夫と云ふ。

三八、顔見て惚れる

惚れ合ふと云ふ事は、美點のみを見ての事なり、裏の缺點まで見てからの事にはあらず、故に月日経ては互に缺點見えすきて厭味を生ずるもの也、兎角惚れたる目には、痘痕も笑くぼに見ゆるとかや、故に缺點は人の横目を借らざるべからず、しかせざれば必ず破鏡の嘆あるを免れず。

三九、眉の曰く

顔面の諸器互に尊卑を争ひ、口は鼻を詬りて曰く余は是れ身體活動の源たる食物攝取の用をなし至重至要たり然るに汝は何の爲す所なくして余の上に位す、當に下るべしと鼻肯せずして曰

く吾れなくば汝は糞尿をも嘗むるなるべしと、更に眼に對して之れを誇り且其上位に在るを責む、眼の曰く吾れなくば汝他物に衝突するを免れざるべしと、依て以て眉を詰る、眉の曰く吾れなくば顔色殆んど形をなさざるなりと。

四〇、奇言と奇行

老子曰、希言自然、故飄風不終朝、驟雨不終日、孰爲此天地、天地尚不能久、而況於人乎。

希言は奇言にあらず道を述べたる言葉なり、見ずや飄風の朝を終へざるを、驟雨の日を終へざるを、天地も尚ほ其奇は久しく保つ事能はず、然るに小人よく奇言を好み奇行を欲す、永續せざる所以也。

四一、クソ虫同様

我等娑婆の縁つき無爲の都に赴き候、出家に成り給ひ佛性の見を磨き、其眼より我等地獄に落ちたるか落ちざるか不斷添ふか、添はざるかを見玉ふ可し、釋迦達磨をも奴となし玉ふ程の人に成り玉ひ候は俗にても苦しからず候、佛四十餘年説法し給ひ遂に一字不説と宣ひし上は我れと見我と悟るが肝要に候、何事も忘念するなかれ、あなかしこ、かへすくも方便の説をのみ守る人はクソ虫と同じに候八萬の諸聖經を讀みても佛性の見を磨かずば此の文程の事も解し難かるべし。

これとてもかりそめならぬ別れては
かたみとも見よ水莖のあと

一休が母は矢張り一休が母なり

四二、本性はかくされぬ

人の性は言葉に出で、着物にあらはれ、所作に移り、酒に飛び出す事多し、由來人の本性は、包んでも隠されず、偽つても致し方なきもの也、更に人の氣は、書にあらはれ、文にあらはれ、勝負事にもあらはる、又如何によく泣くも其真情より泣くと其作り泣きたるとは直ちに化けの皮をあらはすなるべし。
下に着ても音のかくせぬ紙衣かな

四三、己れを計りて人を計らず
人は皆何事も己れの経験より割り出すが常也、水の事をやかましく云ふ人は必ず水を飲み腹を傷めたる人なるべく、寝巻の事をやかましく云ふ人は又寝巻を忘れて風引にでも犯されたる人なるべく去れど人によりては水を飲んでも、寝巻を忘れても病に犯されぬ人あれば一概には論定すべからず。

余が隣に五つになる娘あり、霜の白ら置ける朝、池の金魚を見てさぞ寒からんと云ふ、吾れ戯れに池より連れ来て火に當らせると云へば娘金魚を掬ひとらんとす、吾れ驚きて金魚は水を離せば死ぬ者と教ふれば妙な顔して吾れを見詰む、己れを推して他に及ぼす恵みの心はうるはしけれども已れを計りて他を計らざるは却つて愛もて他を殺す也。

四四、わが身のかなしさ

悲しきは我が身也、心に於ては情が勝ち行に於ては口が先んじ、徳に於ては未だ忠怒の道を知らず、哀れむべき也。
名を絶ち利を絶ちて憂いと煩いとを避けんとすれども尙人の域を脱する事能はざれば今に捨てきれず、心の中には常に道と物との争ひあり。又西行や長明の傳記を讀みては聊か慾も薄らげ

ども尙恩愛深き母君に絆されてそれも得果てず、迷ひの中に迷ふなりけりとは、誠に我が身の上の言葉かな。

四五、頼み難きは我が心

「頼み難きは我が心也事あれば忽ち動き、事なきも又忽ち動かんと欲す」これよく我が心をうたへる語なり思ふに世の人は多く苦みの中に樂みを發見すれども吾れやひとり樂みの中に悲みを發見す、人は此の世を意志にて見語れや此の世を情にて見る悲しきは理也、哀れに感ずるも無理にはあらざる也。

「歡ひも悲みも夕べに來てはあしたに去る哀れ果敢なの浮世かな」是れも我が心其の儘也、棄恩入無爲の境兼ねてより慕はしとは思へども人の憂き目を外に見んこと又我れのねがひらず、嗚呼世を放れんか四恩あるを如何にせん人を救はんか又餘りに

涙脆きを如何にせん嗚呼思へば今の我が身誠に浮草にも似たるかな。

四六、闇から闇

無量壽經に曰く、善人は善を行ふて樂より樂に入り明より明に入る、惡人は惡を行ふて苦より苦に入り冥より冥に入ると。

四七、云はぬが勝ち

云ふてもよし云はでもよしと思ふ事は云はぬがよし、自他に益なき事は又辯せぬがよし、損にならぬ限りは負くるがよし又よき事を聞かしても惡しき事を聞かしても其のよし惡しは直ちに云はぬがよし只月日の明すにまかせ置くべし。

よしあしは云はぬどよしはよしの花
あしはあしにて咲き出でにけり

四八、無窮の受用あり
人の詐くを覺つて之れを言にあらはさず、人の侮りを受くるも之れを色に動さず、此の中無盡の意味あり又無窮の受用ありと言や真に切。

四九、信玄の家訓

武田信玄の家訓に曰く、心に物なき時は體豊か也、心に我慢ある時は愛敬を失ふ、心に慾なき時は義理を行ふ、心に私なき時は疑ふことなし、心に驕りなき時は人を敬ふ、心に誤りなき時は人を畏れず、心に貪りなき時は人に諂はず、心に怒りなき時は言葉和かなり、心に勘忍ある時は事を調す、心に曇りなき時は静かなり、心に勇ある時は悔ゆる事なし、心に迷なき時は人を咎めずと。

情ある所以也と由來利他心に富める人は、なにがなして人の世話を焼き、同情心ある者は又人が知らぬ顔してゐても自ら呼びかけて愛語を放つ事多し。
又思へ途上にても黙して通る人よりは「今日は」と云つて過ぎ行く人がよく、「今日は」と云つて過ぎ去る人よりは又「今日はどこにいらつしやいますか、いや御閑の時はどうぞ」と云つて過ぎ行く人が如何にも慕はしく且つ又己れも一入愉快を感ずるにあらずや。

五〇、致知の工夫

貝原益軒の五常訓に云へり人の博學にして道を知らざるは思の工夫なければ也。思は致知の工夫に於て最も益あり。思ふにあらざれば自得する事難しと。

五十一、心しだい
苦しき日は長く、樂しき日は短し、待つあるの日は長く、待たざるの日は又短し、人待ち程長さ者はなしとはよくも云へるものかな。

思へば長短はわれにありて日にあらず、心擾なれば月日自ら擾に、心閑なれば月日又自ら閑也。古歌に
世の中を四尺五寸になしにけり

五尺のからだ置き所なし

五十二、恃もしい女
女にして體操を好む者は女らしき女にあらず、又唱歌を好む女に浮きたる者多く英語を好む女には、ハイカラ多し、然り而して獨り裁縫を好む者は將來家婦として最も恃もしい女也。

五十三、雀と鶯と時鳥
人雀を愛せずして鶯を愛す、雀の聲や舌より出で鶯の聲や肺より出づ、更に時鳥の聲には哀れを感じず情切なる者存すれば也、人は言に伏せずして誠に伏す、更に愛情には悦服す、暖きもの存すれば也。

五十四、口は利巧
出来る丈よきものを着、出来る丈善き物を食ひ、出来る丈遊びて又出来る丈樂をなさんと欲す、おかしけれども人の願ひ皆此處を出です。否我れは働く爲に生れたり否吾れは好んで苦を求む否奮闘は人生の眞意義なりなどとホラ吹く人あれども。若し彼等に向ひ働くは何の爲か、苦を求むるは何の故ぞ奮闘するは何の爲ぞと問はゞ必ずや答へに窮せん。

五五、死にたかない
死際には矢張り「死にたかない」と云ふが人情にして又自然也、
否斯くありてこそ哀れは一入まざるものなれ。

元より人生に於て最も美なる事は臨終の美には相違なければども
殊更に情を抑へて立派なる豪語や辞世詩を殘さんことは吾れの
望む所にあらず、余は此點に於て資朝卿や俊基朝臣の辭世詩に
は哀れを寄するも蜀山人や水野十郎左衛門の辭世詩には同情す
る事能はず、去れどこは余が一個の私見なり、世の人如何にや。

五六、無愛想は利己的
利他の念ある人は同情心ありて愛想に富む、古語に無愛想は一
種の利己徵候なりとあり。

又愛語と云ふ事あり、常に人に接して愛語を放つ慈悲ありて同

又性質にも色々あり、無口にして執念深きもの、謹み深くして
すなほなる者、多言にして而かも嫉妬心あるもの一々數ふるに
違あらず、而して其最も人に愛せらるゝ者は愛想あり且つ言葉
少くして誠ある女即ち夫れ。

五七、蘆の葉にも
ひもしき時は食を思ひ強壯なる時は名を思ふ。病の時は醫を思
ひ死際には又神を思ふ、思はぬと云ふは偽り也おかざりなり。
見よ溺れる時には蘆の葉にも縋るにあらずや。

五八、良心にも皮あり
正しき事を直ちに正しと云ひ、悪しきことを又直ちに悪しと云
ふは處世の要訣には非らざる也。又人情を解するものなすべ
きことにも非らざる也、至徳を論ずるものは俗に和せず、人の

良心にも皮が、かぶり居れば其心せざるべからず。

五九、心に於て着々

柿如何に己れの味の美なるを説くも、人は熟するまでは手を出ださず、韓信將來に報恩を誓つて却つて賤婦に笑はる、故に人は現在を語り暮し心に於て着々大ならんことをつとむべき也。明日の天氣は誰も斷言はせられず。何事も人なみになれと云ひながら天下をとりたる秀吉それ眞に偉大ならずや。

六〇、四種の受法

樂は苦の種苦は樂の種なる事は一般的理法なれども世には此規を了して悲運に泣くもの少らず、故に世尊教へて曰く世間に四種の受法あり如何んか四となす或は現に樂なるも當來

に苦難を受くる人あり或は現に苦にして當來も又苦難を受くるあり或は現に樂にして當來も又樂報を受くるありと、吾人夫れ此の覺悟なくして可ならんや。

六一、親は子の爲に隠す

葉公孔子に語つて曰く吾が黨に身を直くする者あり、其父羊を盗み子これを証せりと、孔子曰く我が黨の直きものは是れと異り、父は子の爲に隠し子は父の爲に隠す直き事其中にありと。

六二、自ら美とす

陽子宋に行き逆旅に宿す、逆旅の人妾二人あり其一人は美にして其一人は甚だ惡也然るに其の美なる者賤められて其の惡なる者却つて貴まる是に於て陽子其故を問ふ、逆旅の小子對へて曰く其美なる者は自ら美とす吾れ其美なるを知らざる也、其の惡

なる者は自ら悪とす吾れ其悪なるを知らざるなりと、陽子弟子を顧み謂つて曰く汝等是れを記せよ、行賢にして自ら賢とするの行を去らば安くに往いてか愛せられざらんやと

六三、失戀の男女

失戀の女を娶る勿れ、失戀の男に行く勿れ、失戀の女失戀の男共に心は死して己に愛の光は消え失せたる也、悲みあつて樂みなき也。末は破鏡の嘆あるのみ。

六四、夢に逃げまはる

男子子を生むを夢みず、女子妻を娶るを夢みず、心に念せぬをや身になきことは餘り夢みるものにあらず、故に臆病なる人は多く逃げかくれすることを夢み勇敢なる人は物を追ひまはして屢々これを手にすることを夢む、元より夢なれば斬られても噛

みつかれても生死には差支へなければども吾人はそれさへ尙逃げかくれす如何で真劍の此世に出で、誠の鬼を虜にすることを得んや咄々。

六五、冗語の中に

常に冗語を吐き常に諧謔を弄する人は時々冗語の中に實語を交へて人を諷する事あり、元より人の事は責むべきにあらねども其己れに關するものは自ら感知して鏡とせざるべからず、酒中の言と雖も我が行に關するものならば尙醒時と心得て我が身を顧みざるべからず、是れ己れを高うする所以なり。

六六、多惡を招致す

多言は數々窮し、多情は屢々逸す多忙却つて己れを益し、多閑却つて己れを損す更に恐るべきは多才也多慾也、多才は多災を

招き、多慾は多惡を招致す心すべき也。

六七、英雄の心事

南洲翁曰く、命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は仕末に困る此仕末に困る人ならでは艱難を共にし國家の大業は成し得られぬ者なりと。

思ふに彼の大業を成就したるは早く己れを棄てたるに在り、名位二つながら忘れたるに在り、己れを捨てて此處に始めて健氣出で、名位二つながら忘れて此處に始めて正道生る、西郷の西郷たる所以實に此處に存す、今の朝夕名利に醒醒たる者如何で翁の心事を解するを得んや。

六八、お前の着物は短い

木戸孝允嘗て事を自邸に議す、然るに西郷來らず、此處に於て

孝允使を遣りて早く來會せんことを乞ふ、西郷時に着物を洗ひ裸體の儘にて机に向へり、使の到るや、西郷の曰く、着物なし乾ぐまで待てと、使急ぎ歸りて此由を白す、孝允即ち送るに美衣を以てし再び速かに會せんことを求む、然るに西郷到れば事已に決す西郷笑つて曰く

『お前の着物は誠に短い手へ』

六九、一見直ちに親しむ

或人曰く、優美性の其一の徳は親切なり此徳は懇篤なる心より出づるものにして顔面に温雅の容を示し人をして一見直ちに親しましむ、又曰く親切なる人は質朴にして同情に富み満面笑みを湛えて氣六箇敷容ちなしと。

七〇、時宗の臆病

北條時宗幼時甚だ臆病也、或日私に謂らく若し余にして此の病を治せずんば以て世に立つ能はずと。是に於て兼ねてより尊信せる寺僧を訪ひ來由を告げて其道を問ふ然るに寺僧大に叱して曰く、汝の臆病は汝の心より來る、汝自ら之れを取り去る事能はずんば、誰かよく之れを取り去る者ぞ汝の愚も又極れりと、時宗耻ぢて家に歸り是れより大に道を修す。

七一、ウンと加法を行ふ

英國のアデソン曰く、吾人が日々云ふ事の十分の九は皆人の惡口なりと、兎角人の惡事には利子をつけて吹聴し、善事はアベコペにウンと加法を行ふて話すが常也、百の善業も一の惡事によりて其功を奪はれ君子徳高ふして忽ち誹り起る、げに恐ろしきは人心也げに謹むべきは人の惡口なりけり。

七二、事は密を以て成る
古人戒めて曰く、夫れ事は密を以て成り語は泄すを以て敗る、未だ必ずしも之れを泄すにあらざる也、而して語其匿す所の事に及ぶ是くの如きもの身危しと。

七三、際限なき苦海

佛者曰く、人生の事一として苦ならざるはなし、生も苦也、死も苦也、病も苦也老も苦也欲する所の者常に得がたく欲せざる所のもの愈々近づく生者必滅會者定離昨友今仇、父母妻子の愛も終には別れざるを得ず、一切事物無常にして苦惱常に之に纏綿す、此世は實に際限なき苦海也と。

七四、偽りと思ひながら

偽りと思ひながら譽めぬれば

人は妙なもの哉、偽りであつても譽めらるれば嬉しく、誠にてもにがきことを云はるれば腹立たしき心地す、身を敗るも之が爲也、己れを失ふも之が爲也。

耳中常聞逆耳中言心中常有拂心之事、纔是進德修行的砥石、若言々悦耳事々快心便把此生理在矣。

七五、長壽の秘訣

長壽の法や數多し、吞氣に暮すは其一也、聲色を節するは其二也、機嫌をよくするは其三也、然り而して常に善きものを食ひ早く寝ねて遅く起くれば即ち命長き事疑ひなし。

七六、大人の生涯

西哲曰く、凡て大人の生涯は乾々止まざるの生涯なり、彼等は皆貧苦、屈辱の中に半生を過し、世に知られず、世人の爲に誤認せられ、我れに如かざる者の爲に非難せられて半生を過し而して人は眠むるも吾は思ひ人は飲酒に耽けるも吾れは讀書に忙はしく常に自ら永く吳下の阿蒙たらざらんことを誓へり已にして時機一度至るや彼等は忽ち名譽を四方に輝し直ちに前半生の汚衣賤裳を脱ぎ捨てて金衣玉装の身に變ずと。

七七、人をもみ渡し渡して

世の中に湯屋程人を洗ふ職はなく、酒屋程人を酔はせる職業はなし、然り而して又渡守程仁に近き業はなかるべし。

古歌に
人をもみ渡し渡して己が身は

岸に上らぬ渡守かな

七八、枯るるも同じ

妓王始め清盛に愛せられ西八條の第に獨り其の籠を專にす、或日白拍子の妙手等の來るあり、妓王即ち清盛に勸めて共に其の舞を見る、佛時に年漸く十八艶姿恰も花の如し君を始めて見る時は千代も經ぬべし姫小松御前の池の龜岡にと歌ひ終る今様の一曲其容姿の清雅にして其聲の妙へなるに清盛はしばし恍惚として己れを忘れしが忽ち戀情を起し其日より彼れの愛は悉く妓王を離れて佛に注がれ、妓王は遂に家を追ひ出されぬ、此處に於て妓王は熟々人生の榮枯盈虧に感じて此の世を果敢なみもえ出るも枯るるも同じ野邊の草

何れか秋にあはで果つべき
の一首を殘して身を佛道に歸しぬ、斯くと知りたる佛又善心深き性にありけん其後は朝な夕なに妓王の歌を思ひ出で、深く浮世の無常を感じ自ら佛の元に至りて祝髮し共に佛道に歸依して一生を終れり。

七九、人や眞に智也

手水を飲めば乳となり、蛇水を飲めば毒となると華嚴經にあるは面白し、吾人は此の語を聞きて大に叫ばんと欲す人は何故珍膳佳肴を食ひて糞尿を出すかと否こは余が戯れなり人や眞に智也其物を食するや見る見る是れを己れに化せしめ用なきものは忽ち糞尿となして尻より是れを放出す人や眞に智也

八〇、世の中は六つかし

世の中は六つかしきもの哉、先きに飛び出づれば頭を打たれ、後るれば又尻を叩かる、さればとて中に居れば又前後よりはさまれて苦しく、横に出づれば又再び歸り難し、然り而して若し一度地に倒れんか手足面部一度に踏まれて再び顔を上げ難し。

八一、情理合せ至る

或人酒間に説いて曰く「理屈に於て勝ちたる物は負け」と真に然り人は情に於て勝つ術を知れば足れり、情理合せ至る以て天下を動すべしとは至言。

八二、よく云へり

老子曰、知人者知己者明勝人者有力自勝者強、知足者富強行者有志、不失其所者久、死而不亡者壽

八三、勝手な話し

互に色に惚れて居ながら男が捨てたとて女が逃げたとて怨むべきにあらず、色を以て人に事ふるものは色衰へて捨てらるゝは理の當然にあらずや。

世には女郎買ひをする男にして女郎に誠なしと譏る者あり、あかしき事にこそ、己れ色を以て對しながら獨り女郎にのみ誠を以て對せよとは餘りに人を馬鹿にしたる言ならずや、色と誠とは如何に人よき商人にても、まさか賣り買ひはせざるなるべし。

折り得ても心ゆるすな山櫻

誘ふ嵐に散りもこそすれ

女の心が秋の空なれば男の心も儘に冬の空位にはかはる男も女も夫れよく心せざるべからず

八四、自然の教訓

心を静めて物を観れば天地の物一として教訓にあらざるはなし
春は人に樂觀的思想を興へ夏は壯大を、秋は悲觀の念を冬は退
守の想を、又蝶は浮かれ心を、時鳥は物の哀れを諭す、諭すに
は非ざれども諭す様に悟るが尊き也恃もしき人也。
昔道風は蛙の爲に起ち、靈雲和尚は櫻花を觀て悟り、香嚴和尚
は擊竹の聲をききて道を悟りぬ。
思ふに天地自然の萬物を見て理外の理を悟り、物外の物を見る
事は即ち知を致すの元なり、悟れ悟れ夫れ悟の字の吾が心なる
事を。

八五、蟬の妻

世に蝶ほど浮かれ歩くものはなく、時鳥ほど泣き暮すものはな
し更に雀ほど人事云ふ者はなく、蟬の妻ほど又無口なる者はな

けん。

八六、情は自然にまかせよ

喜怒哀色に露さぬ事は吾れの望む所にあらず、去ればとて作り泣
き作り笑ひは又吾れの欲する所にあらず、衷心より嬉しきとき
には躍りて喜び衷心より悲しき時には又涙を流して泣き哀しむ
事吾れは去程おかしとも思はず、否斯くありてこそ人情は有り
難きものなれ。

八七、飯と掛物

三浦梅園曰く、學問は飯と心得べし腹に飽くが爲め也掛け物な

どの様に見せんずる爲にはあらずと。

八八、經驗以外に思ひ遣る

行かずして知り未だ來らざるに已に之を察す斯くの如くにして聖賢は能く經驗以外に思ひ遣る之に反し凡夫は頭をゴツツケて始めて成程と悟り思ひ常に我が心を出でず故に己れを知りて人を知らず、己れの樂しみを知りて人を哀むことを知らず哀しむべき也。

八九、掛け直あり

古人の云へる如く吾人は一方に於ては己れを隠さんと欲し、他方に於ては又己れを彰はさんと欲す故に人の富貴を聞かば其半ばを信じ常に其言は又其行ひよりウンと掛直のある事を承知せざるべからず。

九〇、表面の尊敬

蔭で賞めらるる人あり、蔭で誹らるる人あり、蔭で賞めらるる人は徳ありて得あり蔭で誹らるる人は損ありて危し。思ふに人は己れの利益迄捨てて人に忠告するものにあらず、心には飽くまでも嫌ひながら口には却つて其人を賞めそやす事あり又心には飽くまでも慕ひながら口にはそれと云ひ得ぬが人の誠也故に人はよく／＼此處を顧みて徳を研き行ひを慎まざるべからず。

世に只表面のみの尊敬を受くる程恐しき者はなし。

損から損

憎むとて憎み反すな憎まれて

憎み憎くまれはてしなれば

是れを損して又損す、憎み返す事は餘り利巧なる人のする仕事にあらず。人は憎むとも憎まじ人は咎むとも咎めじ人は怒るとも怒らじ。

負けて勝つ心に知れや首引に

勝ちたる人の倒ふるるを見て

九一、神様になるな

或人曰く、地の穢き所多く物を生じ、水の清き所常に魚なし、故に君子は當に含垢納汚の量を存し高潔獨行の操を持すべからずと、又曰く、山の高き所木なく而して谿谷廻る所則ち草木叢生すと。

九二、見ずに云ふな

見届けぬ内は語るか初櫻

人の意を中傷する事勿れ、聞かずして聞きたりと云ふ事勿れ、見ずして見たりと云ふ事勿れ、人の意を中傷する者は多く人を殺し、聞かずして聞きたりと云ふ者は又よく虚偽を傳ふ慎むべき也。

九三、形氣を以て事を用ふ

或人歎じて曰く、人情鶯鳴を聞けば即ち喜び、蛙鳴を聞けば即ち厭ふ、花を見れば則ち之れを培はん事を思ひ、草に遇へば則ち之れを除かんことを欲すと嗚呼人は只形氣を以て事を用ふ過つ所以也。

九四、個人的で社會的

獨り生れて又獨り穴に入るを見れば人はどこまでも個人的也、又生れ出づると共に人の世話を受け棺に這入るまで人の世話を

受くるを見れば又人はどこまでも社会的也、然かも獨り生れたるを以て獨立の精神を養ひ、死ぬまで人の世話を受くるを以て社会的たらんと欲する者あらば余は將に稱して達道の人と稱へん。

九五、雲泥の差

命までもと口には云へど

胸の中では舌を出す

口でけなして心で賞めて

人目忍んで見る寫眞

胸の中で舌出す者と、人目を忍ぶ心とは實に雲泥の差あり。おかしき様なれども物は形を以てこれを奪ふ事の出来る者にあらず。

忍ぶれど色に出にけり我戀は

九六、金と膽

人の心は妙なものかな、其懷に金のある時は肝迄大きくなり、金の減るに随つて肝は愈々縮み行く、旅先きにての肝は尙更金によりて大きくもなり小さくもなる。

或人は持つた心で居れば善いと云へども金を持たずに居ていくら持つた偽ねしたとて心の淋しさは直らず、去れど金をウンと持ちながら持たぬふりする程楽しく又心強きはなし。

九七、大盜の四徳

或人大盜に問ふて曰く「盜賊の頭になる道ありや」と大盜答へて曰く四徳を備へざれば能はずと其人笑つて曰く盜賊の四徳夫れ如何なる者ぞやと、大盜即ち謂つて曰く。

入るに先んずるは勇也、出づるに後るるは義也、可否を知るは智也、分つ事均しきは仁也、此の四徳を備へずんば遂に大盗たる事能はずと。

九八、浮世の常

浮草や今日はあちらの岸に咲く
咲いた許りならよけれども、咲いた揚句には此方に向いて嘲けり笑ふ悲しけれども浮世の常也。

九九、星様は若い

お月様より若い証據
お星様には角がある

春の月はおぼろにして角立たぬ所に味があり、酒は酔はせて人を踊らせる所に其圓さを發見すべし、彼の蟾螂の如く角立ちたる

る人は何時か必ず肩をスリハガれる者なるべし。
去れど人も若き内は皆角あるが常也、谷の石も海に出づる迄は角がツブレず幾度か突き當り幾度か轉ぶ而して後に漸く圓さを得『どの枝も梯かからぬ柳かな』あゝ人も斯くありたきもの哉。

一〇〇、片びいき

花を見ぬ雁や紅葉のかたびいき

柳櫻をこぎまぜて蝶の飛び交ふ春の野を見ぬ雁のかたびいきす
るは誠に理也一方聞きて沙汰するも、世の中は存外思ひ違ひのあるものぞ又何んでも一圖に早合點して物を誤解する事勿れ、聞いた上にもよく聞きて尋ね探して調べ見よ、そこには必ず道あらん、そこには必ず徳あらん、誤解されて悔ゆるなよ遂には月日の證すあり。

一〇一、心和氣平
昔より性燥心粗にして事を急にするものは一事もなるなく心和氣平にして事を寛やかにすれば功成り名遂ぐと教ふれども吾人は露程も夫れが解らず今に性燥心粗也、今に心和氣平を得ず、悲しむべき也。

一〇二、子も親を思ふ
深草の帝に後れ奉りて俄かに出家したる僧正 遍照 は吾頭髮おろすとてそぞろに父母を思ひ出で涙を流して歌ふらく。

たらちねば斯かれとてしもうば玉の
わが黒髪をなでずやありけん
とさこそあるべきものなれ、世には親煩悩に子畜生と云ふ言葉あり去れどなか世の中に斯かる人許りある者ぞ吾れ郷を出で

て一人親の有難きを知り父を失ふて又一入父の有難きを知る決して偽りにあらず、盡せ世の人父ある内に盡せ世の子等母ある内に。

一〇三、明すまいぞや

心には浪波の事を思ふとも

人の悪きは云はざるぞよき

昨友今仇とは只宗教上の文句にはあらざる也抑も此の世に於て最も恐るべきは己が眞心明けし友の一度ひるがへりて敵となるたる時也其時に及びて如何に涙を流し臍を咬み、あゝ斯くなる事と知らばあゝは語らざりしに悔むとも己に及ばし噫々明すまじきは我か誠也げに云ふまじきものは人の悪口なりけり。

一〇四、他人の方寸

分つた様で解らぬは人情也、古詩に云ふ、他人方寸間、山海幾千里、と此の山海幾千里が抑も恃み難く又最も恐しき所なり、噫々山海幾千里、あゝ山海幾千里。

一〇五、どうした者か

吾人はドウした者か少し得意の事があれば世の中が嬉しくて嬉しくてたまらず又少し失望の事あれば又世の中が厭で厭でたまらざる也某友嘗て余を戒めて曰く情の人は熱すれば逸し冷むれば變ず情の人は實に轉變極りなし 眞に謹しまざるべからずと。

一〇六、禮を知れ

人に接するに長幼先後の序を以てする人は徳ある人也更に貴賤の別を知り主従の別をわきまへ尙進んで職務上に於て官長下僚

の別ある事を知る者は間違のなき人也而して吾人は只理を知つて長幼の序を知らず權利あるを知つて而して官長下僚の別あるを悟らず誤れるも又甚しからずや古人曰はずや禮を知らざればもつて立つ事なしと。

一〇七、吾人の心境

悲しむべきは吾人の心境也、忍ぶべき所にも忍ぶ能はず抑ゆべき所にも抑ゆる事能はず即ち少しも其心に含藏する事能はずして悉く是れを言に發す。故に事は敗れ幸福は自ら離れ去る、あ怨むる事勿れ世と人とを其罪は人にあらずして己にあり其の禍福は決して外にあらずして内にあり。古聖曰く禍福門なし只人自らこれを招くと。

一〇八、心情の爽快

精神の平和なる人は至幸の人也、心情の爽快なる人は又至福の人也、精神の平和と心情の爽快とは已に是れ人間最大の幸福なれば也然して吾人は未だ精神の平和を得ず、心情の爽快を得ず、常に前面の小事件の爲に沈吟し常に人の一顰一笑に心情の爽快を失ふ眞におかしからずや。

一〇九、着物に表はる

着物の色合や縞柄は人各好き嫌ひありやさしき人は自らやさしき色合や縞柄を好み、ハイカラな人は又自ら華美なる縞柄を望む故に着物を見て其人の心立てもあらましは讀まるる譯也。其他帽子やステツキに至るまでよく其人の氣質表はる、又帽子のカブリ様にても幾分か解る様也ステツキなどもやさしき人の丸太持てるは殆んど見當らず。

一〇、不平家の常
或人曰く今の所謂不平家なる者は恰も蟹に似たりと、其故を問へば答へて曰く、蟹の其穴中にあるやエラキ顔して泡を吹きブツ／＼怒りて天下は一呑みに呑みさらなれども扱て引き出して見れば腕はなし去ればとて又道は眞直には歩けず、引き出すや否や直ちに横に走り出すと。

一一、余は馬鹿

噫々此世に於て余の如く愚なる者は又とはあらし功を急いで修養を怠り、人に教ふる事を好んで自ら修むる事を知らず、只一時の名に迷ひて遠きを忘れ俄か造りの學者たらんと欲す誤れるも又甚しからずや總てまことの力は年を経て出で永き苦みを経始めて始めて生ず決して一朝一夕にしてこれを得べき者にはあらず

る也。

一 二 二、只金あるのみ
廿余年全國を漂流し、あらゆる苦難を嘗め盡して歸り來れる一人の知己余に語りて曰く、噫々君は道を以て此の世を渡らんとするか未だく、君は世を知らざる乳臭兒のみ、知らずやまさかの時には親も頼むに足らず兄弟も頼みにならず、神佛素より頼むべからず頼むべきは只一の金あるのみと。

一 一 三、達と寛

孔子云へり達とは質直にして、而かも義を好み言を察して而かも色を見、慮りて以て人に下る邦にありても必ず達し家にありても必ず達すと、又曰く寛ならば即ち衆を得、信ならば即ち人任ず、敏ならば則ち功あり惠ならば則ち以て人を使ふに足ると。

一 一 四、花は花

總ての人に賞せられ總ての人に歡迎せられ又總ての人に同情を得んと欲する者あらば其は人の心を知らざる者也、一と云へば二と云ひ、善と云へば悪と云ふ世の中何ぞ悉く人の賛同を求むる事の出來得んや、花鳥風月自ら争はずして人これを争ひ、山川草木自ら較せずして人これを較す、故に物の是非善悪は、人にまかせて打捨て置くべき也、而かも花は永久に花たり、草は又永久に草たらんのみ。

一 一 五、溫和外に表はれて

古聖教へて曰く、讓は和の元をなし滿は損を招き、謙益を受く、而して喜ぶ時失言多く怒れる時最も失態多し、然り而して溫和外にあらはれ自ら卑くして人に尊めば人親まざる事なしと。

一一六、弱きに同情
 情けある人は自ら弱きに同情し、慾ありて只權勢を求むるに急なる人は又自ら強きに同情す、余は今此處に其の人品の高下を論ずる譯にはあらねども弱き余は又自ら弱き者に同情する者を好み、強きに同情する者を好まず、昔より賢人と云ふ人を見るの道多くありと云へども其最も必要なるは其下位に對する如何を見るにあるのみと誠に至言也吾人はこれを聞きて私かに己が心に耻づ。

一一七、一仰一俯

古人云へり、仰いで山を觀れば厚重遷らず、春秋變化す、雲を吐き煙を飲み巍々として中空に聳ゆ又俯して水を望めば汪洋極りなく、晝夜流注す、波を揚げ瀾を起し怒濤常に天を蹴る、一

仰一俯總て教へにあらざるはなしと。

一一八、問ひ詰むるな

物はどこまでも問ひ詰めて其の是非を正すべき者には非ざる也我れこれを是とするも人これを非とす、争へば争ふ程是非混合して明かならず、去れど争はずして其是を知り世の所謂る善とする所を歩まん事は寸時も忘るべからず。

黙して知る是れを智と云ふ

一一九、有徳者は熟睡す

有徳者はよく熟睡すとあれども此頃は能くは、ねむられず徳なき印にや。又此の頃は何故にや世を思ひ人を思ひ且つ人生の果敢なきに想到して心は常に定らず殆んど浮雲の空に漂へるが如し笑ふべき事なれども致し方なし、近き内に禪なりと修めばや。

一二〇、六容
足の容は重、手の容は恭、目の容は端、口の容は止、聲の容は静、而して顔の容は直にして温なるを尊ぶと名言か。

一二一、御用心

勝つ事もむつかしけれども負くる事も又むつかし、よし小さき事にも人の罪を着て負け居る事は容易の事にあらず、更に利益に負け争ひに負け、名に負けて、静かに道を行はん事は兎ても凡夫のよくし得る所にあらず。
總て勝つ事を好む者は名に走り又よく名に走る人は事々に勝ちを制せんと欲して露程も負くる事を好まず、退いて誠を盡くす事をつとめず、稍々もすれば只上すべりして名のみ狂ひまはる慎まざるべけんや。

一二二、幅をかく

人は誠に驕り強きものかな。たとへ現在は如何程貧しくとも尙ほ昔の富はこれを語りて誇らんと欲し、又俄かに富める人は昔の貧しかりし事は露程も語らず、即ち己が身に得する事は古きも引き出だし、悪しき事は目の前の事も尙これを隠さんと欲す、其他一族の富を肩に持ち、親類の出世を鼻に掛け甚しきは知己の高位にあるを誇りて己れの身に幅をかけんとするものさへありをかき事にこそ。

一二三、親類には欲しくない

或人云へり、「英雄や志士のする仕事を傍で見て居のは善いが、わが兄弟や親類には欲しくない者である」と、よくも云へるものかな、是れあるが爲めに國に盡さんと欲する者は家を離れざる

べからず、世に盡さんと欲する者は慾を離れざるべからず。總て國家の利と一家の利益とは常に相反し個人利と公共利とは又多く相反比例す高山彦九郎も楠正成も國の爲めには善けれども家の爲めには却つて損あり又吉田松陰や蒲生君平の如きも我か家人としては餘り望まじき人にあらず。徳は無慾なり。

一二四、男女の間

遠くて近きは男女の間也、近くて遠きも又男女の間也、而して世は其近きも遠きも共にこれを疑ふ、彼の爪田や梨下の冠のとも比べものにはあらず。昔より君子も此の道を以て屢々疑はれ志士も屢々此道を以て其眞心を傷けらる故に君子は危きに近づかず、誠に恐しきは人心

也、げに疑はれ易きは男女の間也。

一二五、實は借金

聞く事を恥ぢて問はずんば後に再び羞づる事あるべし、羞ぢを忍びて問ひ置かば後には必ず喜ぶ事あらん。すべて人の思想や學問は皆己れの物にあらず、己れの思想も實は己れの思想にあらずして先人の思想也、社會の思想なり己れの學問も實は己れの學問にあらずして、先人の學問也社會の學問也、聞きては傳へ、傳へては教ふ、或人曰く大なる學者は大なる負債なりと。

一二六、樂翁公書齋の銘

白川樂翁公書齋の銘に云へるあり、謹嚴身を保ち、讀書短を廣む、慎交書を遠ざけ知足樂みを享受す而して存厚は福を招致し、

寡慾は壽を延すの第一法なりと。

一二七、山陽の眞摯

頼山陽嘗て畫工に命じ己が肖像を畫かしむ然るに畫工は山陽の機嫌をとらんと欲し頻りに飾りて筆を加へければ山陽の曰く何ぞ飾るの甚しきや余が容貌は斯くの如からず再び其眞を寫すべしと遂に再び其肖像を畫き直さしむ。

一二八、恐しきは誤解

世にもつれて解けぬ誤解ほど恐ろしきものはなし、これが爲めには人も悲しみ己れも悲しむ互に悲みて互に解けず、人にも笑はれ世にも誹らる切なき事云はん方なし、誤解すな、誤解すな、誤解は人を傷け世を毒す、げに慎むべき事にこそ。

一二九、心體は天體

古人曰く心體は便ちこれ天體なり、一念の怒は震雷暴雨、一念の慈は和風甘露、一念の嚴は烈日秋霜なりと、又曰く春は人を暖め、夏は人を盛にし秋は心を靜かにし冬は人を冷殺すと。

一三〇、未だく

誹られては怒り賞められてはあがる吾人の通患也。誹られては忍び讚められては耻づ至人の境也、吾等は自ら高慢ぶり而かも好んで人の悪事をあばき出す恐るべき也之れに反し至人は人の咎を隠て善を擧げ己れを省みて謹み深し福の集り來る所以也。

一三一、可愛さ餘つて

親はよく子に向つてお前の事には一切關係せずと云へども夫れは只口先き計りなり決して眞から云ふものにあらず實は可愛さ餘つての戒め也。之れに反し他人は萬事出來る丈世話致します

と口にはよく挨拶すれどもまさかの時には其萬分一をも助くる者にあらず親の一切關係せずとは即ち眞の戒めにして他人の萬事出来る丈世話致しますとは只口先の挨拶也、親の言は血より出で人の言は口より出づ、夫れよくよく鑑みざるべけんや。

一三二、古人の糟粕

桓公書を堂上に讀む時に車大工輪扁堂下に輪をけづる椎鑿を釋つて堂に上り桓公に問ふて曰く公の讀む所は何の言となすやと桓公曰く聖人の言也輪扁曰く聖人ありやと公曰く死せり輪扁曰く然らば即ち君の讀む所は古人の糟粕のみと、桓公怒つて曰く寡人書を讀む輪人安ぞ議するを得んや説あれば即ち可也若し説なくんば直ちに殺さんと輪扁曰く臣や臣の事を以てこれを觀るに輪をけづる事徐ければ甘くして固からず疾ければ則ち苦くし

て入らず徐ならず疾ならずこれを手に得而して心に應ず口云ふ事能はず術あつて其間に存す、臣以てこれを臣の子に諭す事能はず臣の子又もこれを臣に受くる事能はず是れを以て行年七十老いて尙輪をけづる古の人と其傳ふべからざる者と死せり、然らば即ち君の讀む所の者は即ち古人の糟粕のみと。

一三三、云はぬが勝ち

知つて知らざれ見て見ざれ、聞いて聞かざれとはなつかしき言葉也、去れと言ふて言はざれば横着也、吾人は決してこれを學ぶべからず。

よき事は見聞いても云へ悪しきことは見ざる聞かざる云はざるぞよき

一三四、人を釣る法

余が友に面白き男あり彼れは曰く、人を釣ると肴を釣るとは同じ事也と其故を問へば答へて曰く。肴を釣るには餌先きに針の見えすかぬ様にするが肝要也然かせざれば肴は決して喰ひつく者にあらず、人を釣るにも餌先きに針が見えすきてはだめ也針を隠して水に投じ喰ひつきたる時すかさずピンとはぬれば直ちに慾深き人魚は掌中に入るべしと。をかしけれども又一理なきにあらず。

一三五、徳は和也

人の悲しむ時には悲しみ、人の喜ぶ時には喜ぶこれを徳と云ふ昔より徳は和也と云ひ又は徳は成和の修なりとも云ふ而してこれを修むるに道あり、一は我を通さぬ事也二は大同に合して小異を捨つる事也、三は衆情を汲んで私情を抑ゆる事即ち是れ。

一三六、楊震の四知

昔支那に楊震と云ふ縣知事あり、此人性至つて謹直にして公平無私の人なりしが或夜一人の男來りて一封の金を差出し、是れはほんの寸志也外に知る人なければ何卒御納め下さいと云ふ、楊震屹度容を正し聲をはげまし叱して曰く何ぞ人を過るの甚しきや天知る地知る吾汝又共にこれを知る咄無禮者、直ちに其金を持ち歸るべしと疊を蹴つて怒りしかば彼は全く面目を失ひ悄然として立ち去れり後世傳へ稱してこれを楊震の四知と云ふ。

一三七、只恕あるのみ

己れを推して他に及ぼすこれを恕と云ふ昔より仁に到るの道は只恕あるのみと云ふ、恕の字は又愛れむ思ひ遣る、許す、寛假す等の意義あり、思ふに忠にして恕これ處世の秘訣たるべきか。

一三八、化け比べ

知つて居ながら口には云はず、騙された積りで人を騙し、騙した積りで又人に騙さる、世の中は狐狸の化け比べとは云ひながらさてさて四十八手の裏表、用心の上にも用心すべき事にこそ。

一三九、必ず和す

古人云へり、來れば即ち迎へ去れば則ち送る、對すれば則ち和す、五五十、二八十、一九十是れを必ず和すべし虚實を察し、陰伏を識り、大は方所を絶ち、細は微塵に入る、殺活機に在り變化時に應じ事に望み心を動す莫しと。

一四〇、互に示す

悪人は悪を懐にし賢人は道を懐にす而して又悪人は悪を隠して出し賢人は道を隠して出す、故に一は人を殺し一は人を活す、

而して中間の人は二つながらこれを懐にせず互に示して互に相表す、をかしき事にこそ。

一四一、大小高下

小さき事を大きくなす人は心細き人也大きな事を小さくする人は心の大なる人也世の中は議論によりて小さくもなれば大きくもなる只心の持ち様一つなり而して其小さき事を大きくなす人の心を尋ねれば多くは恕の心なき人也又大きな事を小さくする人は多くは情けありて人を哀れむの心深き人也一は理を知り一は情を知るこれ人に大小高下の分るゝ所以也。

一四二、ズンと飛べ

南洲翁は我が勇氣の秘訣は己れを棄つるにありと云ひチルソンは大膽なる行爲は却つて安全なりと絶叫す又或人は云ふ身を棄

て、こそ浮ぶ瀬もあれと思ふに世の中の事を一から十迄成功せんと思へば遂に手は何れにも出だされず、飛ぶ時は小溝でも思ひ切つてズンと飛べとは善くも云へるものかな。

一四三、教へ難し

西人云へり、人よ汝は千年も生きん心にて居る勿れ死は汝の頭にかゝれり爾が生ける間爾の働き得る其間正しき人にてあれど然るに悲しい哉俗人に死を教ふれば却つてこゝに力を失ひ直ちに悪道に狂奔すげに致方なきは世俗の常なり。

一四四、慢心の致す所

伶俐なる人は時々氣を短かにして人を冷評す才を恃むが故也今一つは自負心強さが爲也更に極評すれば己が才を恃む慢心の致す所也或人は才ありて自信あるものは其所作横柄也と云ふ去れ

ど吾人は決して斯くの如き人を範とすべからず才あるも誇るべからず自信あるも横柄なるべからず

一四五、物體ぶる奴

おかしき事を云ひても笑はぬ人と常に、ニコニコして愛嬌ある人とを比較するに前さの人は個人的人物多く後の人には情けある人多きが如し、前さの人は物體ぶり後の人にはよく有りの儘に笑ひ興ず、吾れ性來物體ぶる事を好まず而して有りの儘に笑ひ興ずる人を好む、前さの人は重き様なれども吾れは是れを好まず、後の人は輕き様なれども吾れは却つてこれを愛す世の人は如何にや。

一四六、雨が横にふる

借りのある前では雨が横に降り

雨が横に降る道理はなけれども借りのある前では傘を横にさす卑劣の様に見ゆれども實はこれが人情也、貸したる人は又借りたる人よりは記憶強く肩も高しこれが即ち人の情にや。

一四七、矢張り豪い

古人云へり君子は矜にして而かも争はず群して而かも黨せず衆の惡むをも必ず察し衆の好むをも必ず察すと又曰はく恭ならば侮らず寛ならば衆を得信ならば即ち人任ずと。

一四八、一寸先きは闇

今宵明日の天氣を賞めて置けば明日は忽ち雨となりて人に笑はるゝ事あり又其日の天氣にても餘り朝早く賞め置けば夕方には雨となる事あり世の中は一寸先きは闇也當てにはならず吾人の生涯又斯くの如し故に人は現在を語りて將來を語るべからず。

一四九、衆異と眞理

衆異却つて眞理を生ずと云ふ事あり是れは斯うである、夫れは斯うである否夫れは二つ共成つて居らぬあれは斯うであると各人が各異の意見を陳述主張するを衆異と云ふ何んでも協議事のある度に固くとつて動かぬ頑固ものゝ注意すべき事也一人の所存は往々にして過つ事あり彼のヘーゲルの唱へたる立破和の三段階が思想進歩の形式なる事を悟らば又聊か鑑がみるべき也。

一五〇、味ある言

古聖教へて曰く冷より熱を見然る後熱所の奔勞益なきを知る擾より閑に入り然る後閑中の滋味深長なるを覺ゆと又曰く事を急にすれば明かならず寛にすれば自ら明かならん是れを急にして急を招き以て益々其頑を増す事勿れと。

一五一、獨り立ち
天は力あるものに與みして力なきものに與みせず天尙ほ然り況
んや人に於ておや故に吾人は餘りに上の手を引かん事を願ふべ
からず上時に手を放つ事あり又下の尻を押さん事をも望むべか
らず時に尻を押されて却つてヒツクリカヘル事あり。
筈や其日の内にひとり立

一五二、言輕ければ
余は今迄直ちに善は善とし惡は惡とするを以て正しき人物とな
し且つ又其思ふ所は少しも含藏せずして悉くこれを言に發した
り然るに夫れが爲却つて禍は襲ひ來り我が心身を苦しめし事
一再にして止まらず又余が友は一言の過失によりて衆人の憤怒
を買ひ泣いて謝したる事もあり言輕ければ則ち憂ひを招くの古

語眞に身に泌みて恐ろし。

一五三、片隅に押し込む
余が隣りに七十許りになる老人ありて花育てが仕事なるが其庭
に並べられたる五十幾つの花體は代るく美しき花をつく然る
に老人は其美しき花の咲ける者は縁に持ち來りて賞で四五日立
ちて其花少し萎るれば又直ちに庭の片隅に押し込みて顧みずあ
たり前なりと云へばあたり前なれども人情の轉變これにても聊
か感ぜらる

一五四、自我實現と治善
某倫理學者説いて曰く自己の實現は社會共通の善即ち治善な
ると共に自己の最高善にして社會の爲めには各人が自己を完全
にすると云ふ外には善なく自己の爲めには社會の治善を進むる

と一致して自己を完全にする外には又道はなしと。

一五五、少しきの腕

少し腕ありとて誇る事勿れ。少し腕ありとて誇れば却つてわが身を失ふ事あり、彼の蜂を見ずや彼れは少しの尾剣を恃みてハ手起るが故に遂には人に叩き殺さる然るに吾人は少しの知識を鼻にかけて此の世を活歩せんと欲すあゝ又淺ましからずや。たのみなき角とし思へ蝸牛

一五六、吾人の通弊

ジョンソン博士曰く、我が子に如何なる書を読ましむべきかと考へつゝある間に他の少年は已に二冊の書を読み終れりと。是れあるが爲に吾人は只徒に志を高遠に馳せずして現在に働かざるべからず現在を卑しみて働かざれば又現在を出づること

能はず、現在に働きて而して志を高さに持す是れ處世の秘訣たるべきか。

一五七、腕のなき奴

腕ある者は容易に人に示さず而して其の腕のなき奴に限り頻りに腕のある似ねをなし人前にて何かにつけて古語を引きて喋々論辨し以て腕のある奴じやと賞められんと欲す然して吾人は其最も甚しきもの也。

一五八、よく善言を聞け

真に親切なる人は時々面前にて其人の欠點を指摘す而して善人はこれを喜び受け不善人は忽ち色を變じて憤怒す故に古人も云ふ只善人のみよく善言を聞くと。

一五九、意識ある誇張

自ら事實を構成し又自己の經歷したる所を隨意に文飾して語るものあり是れによりて以て他人を喜ばしめ斯くて又自ら喜ばんとする者は意識ある誇張にして自慢心ある人の爲す所なりと至言と云ふべし。

一六〇、私も其通り

莊子曰く世俗の人皆人の己れに同じきを喜び而して人の己れに異なるを惡む、己れに同うして是れを欲し又己れに異なるを欲せざるものは衆に出づるを以て心となす也衆に出づるを以て心となすもの安んぞ又衆に出づるを得んやと。

一六一、青年の通弊

或人因循不決斷の青年を戒めて曰く自己一身上の行爲に關して父兄に相談を重ねて自己の決斷に訴ふるの道を知らざるものは

畢竟するに自己が勇躍奮闘の活氣を缺如せる罪にして他日に至り自己が痛恨の基を作らずんばあらず苟も心中に於て絶對的勇氣の横溢するあらんには危險恐怖の細波は決して風に伴ふて生ずる事あらざるべしと又曰く
今の青年は強いて粗暴執拗の所行を爲し絶えず人と小争をなして揚々自大なりとし且つ低位に適するの身を以て好んで大望を抱き大言を吐き以て自ら豪傑の風を得たりとなし却つて其失意に遇へば志氣沮喪して忽ち緘黙するに至ると吾人夫れかんがみざらんや。

一六二、あら恐し

世に怨み程恐しき者はなし、例へ己れが悪くとも己れは怨まで人をば怨み己れは憎まで人をば憎む、夫れが爲めには陰にて悪

口する事あり無き事を作りたてて誹る事あり、然り而して其最も恐しきは、色事を借りて怨みを報いんと欲するものより甚たしき者はなし。

一六三、馳走が少ない

貧しき家に行きて馳走の少しと誹るものは誹る人の罪也否人情を知らざる者の言草也衣食足りて禮節を知る誰れか人に馳走をなして人と共に楽しむ事を喜ばざらんや、道は知れども盡すを得ず禮は知れども餘財なしとは是れ貧世帯を持てる人の朝夕口にする一大痛苦と知らずや。

一六四、己れは豪い

口には云はねども人は皆「己れは豪い」との自負心を有する者也、而して此自負心がやがては慢心となり倨傲となり偏狭とな

り遂には豪いが獨り天狗の豪いに成り終る語を換へて云へば此の弊は特に自尊心強き人の陥り易き所也。吾人の如く若き者は世事にも暗く思慮も浅ければ己れは豪いと考へは先づ、除き去るが肝要也、出来る丈け口を閉ぢて耳目を大きくするが至緊也世の中に若きもの、豪き者程あてにならぬはなし。

一六五、當り前

一知己語りて曰く余が村に一人の有志あり其人の財ありて豊なりし頃は意見も悉く通る又事ある時は人々常に上にカツギで敬ひ尊みしが財を失ひし今日にては敬ふ人もなくひそかに指してひそかに笑ふと、云はずとも知れたる事かな、人は道を敬はずして金を敬ひ人を尊まらずして財を尊む、あゝこれあるが爲めに

現世は滔々として皆金に狂奔す。

一六六、善根を植ゑ難し

形ちを宇内に寓する事又幾何もなき事を思へば自ら胸中の慾念は消え去りてそこに道心顯現すあゝ此の時の其心世にこれ程尊きものはなきなり昔より鳥の將に死せんとするや其聲悲しく人の將に死せんとするや其言や善しと云ふ洋の東西時の古今を問はず總て幾多の士は皆此の理に洩れず其臨終には必ず美言あり釋迦が厭世の念を起さざれば衆生の心底には善根を植ゑ難しとは誠に心理を穿ちたる言葉也。

一六七、下葉は青し

只徒に己が名の大ならん事を望む事勿れ名とは實の賓也只徒に又名の大ならん事を願はんよりは朝夕わが誠の足らざるを嘆く

べき也實なくして名の大なると實ありて名の小なると抑も何れが尊むべき又抑も何れが安らかなる。

去る日の暴風雨にて倒れし樹木を見るに其倒れたる者は多くは葉のみ茂りて根の淺きもののみ也『來て見れば下葉は青し初紅葉』吾れも人も夫れ心せずや。

一六八、斯かる人に注意

フェルザム曰く俄かに友人なりと公言する人に注意せよ燃ゆるに先き立ちて煽を上ぐるが如き愛情は決して永續せずと。

一六九、得たりがほ

知られんと思ひ誇ればなかくに
わがまだしきを人に見らるる
出る杭は打たれ、蛙は飛び出して却つて人にも踏まれ蛇にも吞

まる。吾人夫れ心せざらんや。

得ぬ事に得たり顔する人にこそ

仕落ちも恥もあるものと知れ

一七〇、餘年幾何もなし

安井息軒年七十にして深夜手に巻を捨てず門人彼れの健康をそこなはん事を恐れ諫めて曰く先生已に老吾人病の起らん事を恐る乞ふ深夜の讀書は廢し給へと然るに彼れ襟を正うして曰く子等は年尙若ければ學ぶの日多し吾れ老餘年幾何もなし故に益々學につとめざるべからずと。

一七一、おかしき心

難儀せずして金を儲け出来る丈善き物を着出来る丈善きものを食ひて一生を楽しく暮さんと寝た良毎に目をつむりて工夫すれ

ども一向良き考は出でず後には何時の間にか夢に入る、夢にては時々千兩箱を拾ふ事もあれども醒むれば直ちに消えて元の無になる真におかしきは人情也。

一七二、辯は黙に如かず

或人云へり人物が小なれば小なる程世間から非難されたる時は色々辯解して止まざるもの也と而して吾人は一口誹られては直ちに辯解し二口誹られては直ちに怒りドコマデも辯解して止まらず遂には辯解が辯解を生み。辯解が非辯解となりて煩はし故に云ふ辯は黙に如かずと。

一七三、私の強き人

主我的觀念の強き人は事々に我意を立て是非を論じ稍々もすれば角立てて小口論を始め何彼につけて小我を張り人の迷惑は露

程も察せず人と争ふ事を何とも思はず小さき事も大きく論じ笑ふべき事にも腹を立つ斯くの如き人は目の前にては賞めらるれども蔭にては笑はる。

一七四、自らめりこむ

神よ願くば吾れを八難七苦に遇はしめ給へと是れ山中鹿之助の勇氣也。

憂き事の尙此の上に積れかし

是れ熊澤蕃山先生の心氣也。昔より云ふ人盛んなれば神崇りなく氣壯なれば百事皆當ると、而して吾人は手を合せて神に助けを叫び自ら悲みて自らメリコム餘りに夫れめめしからずや。世の中をなになげかまし山櫻

花見る程の心なりせば

一七五、出た

宴會などにて思はず知らず飛び出して、「デタデタ、スツトサノヨイヤサ、酒は千杯飲め湯釜で湧かせ」と躍り出す人程愉快なるものはなし、記者も藝があつたならと度々思へども今の我が身にはそれが出来ず何時も四角ばつて興を殺ぐ去れど心の中には何時もスツトサノヨイヤサ。

一七六、即時斷行

行く先きは兎やせん角と思ふ日の積りて老の身とぞなりける。恐るべきは今日只今也、決して明日にあらず。然りて此世に於て今日只今より早きものはなく今日只今より又新しきもの

はなし。

一七七、むつかしい所
かゝる時こそ命の惜しからめ

かねてなき身と思ひ知らずば

昔の武士は云ふ一旦心の中にて死したる者にあらざればまさかの時には役には立たずと。

一七八、口と心は他人

人に口には常に好辭を弄すれども下の口にては常に糞尿を放失す。

裏表なき團扇や清水の如き人はとても此の世にあるものにあらず況んや玲瓏玉の如き人をや。
水も折々は濁り

天も時々曇る

一七九、自ら選べ

或人曰く自重心なく自信力なきものは臆病となり怯懦となり一言毎に周囲を窺ひ一行毎に他人に諂ふ生より死に至るまで徹頭徹尾外他の奴隷となり自ら行を選ぶ事能はず自ら事を決する事を得ず常に外界の恩恵を待ち恒に他人の願使を伺ふ這般の輩には自己許り賤劣憐むべきものはなしと。

一八〇、娘に似たり

西人曰く機會は内氣なる娘の如く差し俯向いて過ぐるが故に不注意なる者遅緩なる者怠惰なるものは其面を見る事を得ず爰ぞ況んやそれを留め得んや只敏捷なる者のみよくこれと握手する事を得るのみと。

一八一、善は善、悪は悪
孟子人の性を善と云ひ荀子はこれを悪と云ふ而して董仲舒出で始めて始めて性善悪混合説を稱ふ思ふに其善なるものは自ら善也其悪なるものは又元より自ら悪也而して其中間のもものは善悪何れにも移り變る。

一八二、心の衛生

遜子遯の言に曰く善く生を攝する者は思を少くし慾を少くし事を少くし語を少くし怨を少くし怒を少くし惡を少くすと、然るに吾人は常に思愁多き事多く而して怒と慾とは身を離れず自ら生を短ふする所以也。

一八三、性質の表徴

言は心の聲也、色は心の容ち也而して舉止は其性質の表徴と云

つて可ならんか、眸子は又心の鏡也、孟子云ふ人に存するもの眸子よりよきはなし眸子は其惡を掩ふこと能はず胸中正しければ即ち眸子瞭か也胸中正しからざれば眸子くらし其言を聞くや其眸子を見よ人焉ぞかくさんやと。

一八四、成功の堂

西人曰く成功の堂は常に其門戸固く閉さる入らんと欲するもの自ら之れを開かざるべからず而して其都度閉されて先入者の孫といへども子といへども自ら其戸を排せざるものは其堂に到る事能はずと。

一八五、治心修心

佐藤一齋曰く、心身は一也心を養ふは澹泊にあり身を養ふも又爾り心を養ふは寡慾にあり身を養ふも又然り小藥はこれ草根木

皮大薬はこれ飲食衣服、薬原はこれ治心修心。

一八六、五指即ち一手

世祖嘗て各宗派の人が争論するを見て其手を揚げ之れに謂つて曰く幾指なるかと彼等答へて曾く五指也とこゝに於て世祖彼等に謂つて曰く五指即ち一手ならずやと、宗派の爲めに覇を争ふ現代の僧侶夫れ少しく鑑みすや。

一八七、遂には表はる

一の嘘を隠すに更に又十の嘘を拵へざるべからざるが如く秘密の最小部分を明したる者は最早其他をつゝむ事能はず問には落ちず語るに落ちるこれ又偽りの遂に包む能はざるを戒めし言葉也誠にましたる智慧はなしとは慥に夫れ千古不磨の金言と知らずや。

一八八、眞の文學者

故高山博士は曰く凡そ文學者に要するもの學殖然り識見又然り而して最も得難きものを氣魄となす是れを以て眞正の文學者は古へより傑士の事業也彼れにして若し其所を換ふれば或は教への爲めに血を流すの義人となり或は義を見て難に赴くの國士となる夫の紛々たる遊蕩兒無頼漢にして偶々穿兪の技を弄ぶもの果して何するものぞや又或人は曰く才學の見る能はざる所を愛はこれ透過す學は機械的也情は生命也學あつて文飾あらん規則あらん然れども熱情の之を溶解形造するにあらずんば遂に詩歌なく音曲なしと。

一八九、家康の用意

家康嘗て秀吉に答へて曰く

「某は御承知の如く三河の片田舎に生れたれば何も珍しき書
畫調度の貯へはこれなく候、されど某が爲めには水火の中に
入りても命を惜まざる者五百騎計りも侍らんこれこそ家康が
身にとりて第一の寶と存ずるなれ」と
幾分強きを秀吉に見せたがりし家康よし多少の誇張はありとす
るも彼れが用意の一般はこれにても聊か察せらるべき也。

一九〇、敬遠

才を恃みて空威張りに威張り虚勢を張り他人を輕蔑し常に人を
抑へて己れのみ高きにのぼらんと欲するものは必ず敬して遠ざ
けらる、よし表面は如何にも其人を敬ふ様なれども實は心に嘲
り笑ふ然して斯かる人に限り一向自ら夫れを悟らず譽むれば益
々ツケ上り愈氣取りて愈々高ぶるおかしさ云はん方なし。

一九一、あの人
心にて「あの人」と慕はるゝ程力強きものはなく又心にて「あ
の人」と嫌はるゝ程恐しきものはなし、心にて「あの人」と
と慕はるゝ人には福自ら集り來り心にて「あの人」と嫌はる
ゝものには又何處よりか禍來るあゝ吾れもまた此の心にて「あ
の人」と慕はるゝ者になりたきもの哉。

一九二、其徳全し

行はずして語る人あり、行ふて語る人あり、行ふも語らざる人
あり行はずして語れば人笑ひ、行ふて語れば其功薄く黙して行
へばこゝに始めて其徳全し。

一九三、大怪物

ホルムス曰く處世と云ふ大怪物の怖しき長髯をふり立てて來り

近く時若し勇敢なる青年あり敢然逆ひ立ちて其髯を搏握するた
らば則ち彼は髯の脆くも抜けて彼の手に残るに驚くならん蓋し
大怪物のふり立つる怖しげなる長髯は唯疑懼を抱ける怯冒険者
を威すに過ぎざればなりと。

一九四、思ひ切れ

成敗を度外に置かば心常に平かなるべし大膽なる行爲を却つて
安全なりと叫びたるネルソンの勇氣吾れ甚だこれを愛す吾れも
人も知る如く、小溝と雖も思ひ切つてパンと飛ばざれば水に落
ち込む恐れあり、思ひ切るとは己れを捨てて動くこと也、古の
偉人即ちこれをよくせり、吾人それひとへに萬全をのみ計りて
朝夕只クヨクヨすべけんや。
思ひ切る心の中をつるぎだに

あらば浮世のつなもものかは

一九五、静観

心を静めて物を見れば、おかしきこと多く、心に怒りて物を見
れば怨むこと多し怒れる目には、ひがことも正しくうつりなほ
き事も静ならざれば正しくは見えす心すべき也。

一九六、廣き世界

「身に議論なければ世界即ち易し」こは儘に心に銘すべき金言
なりとは飽くまでも承知すれど、吾人はどうしたものか動もす
れば口に角立てて、泡ふきて、この廣き世界をせまくす、わが
心の峽き故にや。

一九七、記者に望む

記者に望むもの九あり、一には識見也、二には學殖也、三つに

は氣魄也、四つには筆を以て書かずして涙を以て書くこと也、五つには權に走らずして弱さに同情すること之れ也、六つには情理を提けて進み行くこと也、七つには心を恬淡にして常に和平を保ち衆の惡むをも必ず察し衆の好むをも必ず察すべきこと是れ也、八つには最大多數の最大幸福を標準として筆をとること也、九つには新聞が口と筆との事業なるを恥ぢてわが身のわが筆に及ばざることと恥づることこれ口と心と他人ならざらんことを心掛くべきことこれ也是れあらば記者の筆は世を動し人を化し萬生の擁護者たらんこと期して俟つべき也。

一九八、獨身

「獨身で居ると云ふのも云はくあり」獨身を好む女のあるべき筈はなけれども、それらしき風の吹く心地す、己れのひがめか、

もしありとすれば其罪誰にかとはん、教育家にか社會にか果た自然の勢にか、問ふも答へず、答ふるも應せず、嗚呼それこの世は一步一步、歩を闇に進めつゝあるか。

一九九、己れの才

非分の望を抱けば身苦し人は只己れの才能の出来る限りに於て出来る丈己れを大きくせんことを心懸くべし、己れの才は己れより外に知るものなければ親のすすめも、人の諫めも、あてにはならず、故に自信を以て事に當り敗るれば、それまで也、天運とあきらめるまでの事也。

二〇〇、分は常なし

「人も世の果てを觀せよ落し水」水は暑き日に人の命をつなぐ米を育つれども、育てあぐれば、一どに「ドツ」とつき落さる、

そまの花も盛りには、人にほめらるれども、やがては棒にて叩か
かる、分は常なし故に時めくも誇るべからず、功あるも安んず
べからず、浮世は常なければ也。

二〇一、吳臨川曰く

吳臨川曰く予嘗て天下の人を觀るに凡そ氣溫和なるものは壽、
質の慈良なるものは壽、量の寛洪なるものは壽、言の簡默なる
ものは壽、貌の重厚なるものは壽也と至言也。

二〇二、道の歩き方

塵の立つ時は人より先がよく、闇夜には人の後より行くが安ら
か也、又人多くしてキシル時は、先きは苦しく後も又恐れあれ
ば中に居るが肝要也、道せまき時は一步を譲りて後れて徐に歩
めば寛かなれども競へば肩をすり、身苦し、おかしきやうなれ

ども聊か處世の道にかなへり。

二〇三、稻の花

「誠あるものにだてなし稻の花」米は世界の人の命の親なれど
も別にかざらず、却つてばたん芍薬の如き用なきものが、身を
がざる、梅も櫻の如くは華やかならず松も杉も皆然也、又吉野
や嵐山は飾れども富士には及ばず誠足らざれば也。

二〇四、人で暮らせ

この世は矢張り人にて暮すが善し、神となりて渡らんとすれば
身苦し。

二〇五、親和の至り

是非を責めずして世俗と處るは賢の至也酔うて此世を觀る知の
至り也、獨行の操を持しながら尙獨醒をほこらずして世俗と處

るは親和の至り也。

二〇六、精誠の至り

莊子曰く、眞とは精誠の至り也。精ならず誠ならざれば人を動かすこと能はず、故に強ひて咒す悲と雖哀しからず、強ひて怒るもの嚴と雖も威ならず強ひて親むもの笑ふと雖和せず眞に悲むものは聲なくして哀し眞の怒るものは未だ發せずして威也眞に親むものは未だ笑はずして和す眞に内にあるものは外に動く是れ眞を貴ぶ所以也と。

二〇七、人生最も苦しき所

胸中に一戀字を擺脫すれば充分の爽淨充分自在人生最も苦しき處これこの心とはよくも云ひ得たり噫々それ吾人青年輩は何の日にこの境地に至り得るや。

二〇八、愚の極

己が高き理想を凡人に打開けて同情を求むるは愚の極也、又己が國家社會に盡さんとする献身的意志をば父母兄弟に向つて話すべからず是れ却つて己が献身的意志を滅殺せらるるの恐れあるのみならず却つて彼等をして己が爲に心配を重ねしむる憂ひあるに過ぎざれば也古人曰はずや下士は道を聞いて大に笑ふと

二〇九、天地の大

天の大なるは物として覆はざることなきが爲也、地の大なるは物として載せざることなきが爲也。

二一〇、澁柿を見よ

花咲いて始めて水仙の葱に異れるを知り、熟して始めて澁柿の甘きを知る、ワシントンもエトンの學校にありては痴と呼ば

れゴウルドスミスも學校にては木匙と嘲けられたり去ども一は
遂に大統領となり一は遂に文豪となりて共に名を一世に馳せぬ
嗚呼是等の偉人の偉人たりしを得しは、生得の才能によれるか
習得の才徳によれるかここ吾人の大に討究を要す。

二二一、學を街ふ

人前にて差し出口多く問はぬに語り出すは學を街ふ也己が才を
示したがる也、問ふもひかへ目にして遠慮するはこよなくした
はし兼好法師の愛嬌ありて、言葉の多からぬこそあかず向はま
ほしけれとは即ち是也。

二二二、自適

自適の尊きを知れば強ひて人を誘はず又強ひて人に物を進めず
酒は人の飲むにまかせ、歌は心の開くるを待つ、無愛相に似た

れども決して然らず。

二二三、死後に彰はる

偉人の真心は死後に彰はれ、人の眞價は棺を覆ふて始めて定ま
る然るに世には、動もすれば盡さずして己れに真心の存するこ
とを吹聴せんと欲す名は實の寶也てふ語を解せざるにや余に拙
作あり。

つくしたる後に始めて真心は

世にあらはるるものところを知れ

二二四、短氣は損器

短慮の戒めとして盤珪和尚のものせる、十條眞に面白し、一に
は後悔あり二には物くるし三に其愚表はる四に知ある人親まず
五に他人に仇の思ひをなす六器を減す七病を生す八争多し九苦

勞多し十衆惡發すと、心すべき也。

二一五、水なる哉

徐子曰く仲尼烝々水を稱して曰く水なる哉水なるかなと何ぞ水に取るかと、孟子曰く源泉混混々晝夜を舍めず科に盪ちて後進み四海に放る本あるものは是の如し是れ是れをとるのみと。

二一六、金言より實行

金言貴きか實行貴きか、現代學者の一顧すべき問題也只徒に學に精にして行ふに粗なる現代の學者余は將にこれに唾せんと欲す。

二一七、賀狀天外より來る

除夜の賀狀も珍しからず時に或は二度目の賀狀も來ることあり新年受し年賀狀幾百枚の其中に月日は勿論發信人者の名前さへ

なきもの數枚あり蓋し天外より來りしものなるか随分左記の通りと書く左記を忘れ別封某氏へ杯と書して別封のあらざることあり發信の際は宜敷注意すべきなり。

二一八、世の中は芝居あり

淨瑠璃歌舞伎を産み出し「オツペケ」新派を産み出し謠曲能狂言となり萬歳も蕃番を演じ源氏節も芝居を行ふ近來活動も亦盛に芝居的となれり其他神樂の獅子舞い人形芝居猿芝居數へ來れば際限なし惟ふに世の中は總て芝居なり日くの三面記事、幾多の喜劇悲劇を演せらる蓋し此世は一の大舞臺人は皆役者なるか。

世の中を夢と思へば若にならず
芝居と觀れば可笑しくもあり

二一九、大きな傘
 近來個人主義を唱導する學者多し我邦古來の家族制度を非難して曰く家は只之れ雨露を凌ぐの場所たる而已他に何等の意味あるものにあらずと余幼時習へり日本の家は木に造り西洋の家は瓦石にて疊むと之れ住時小學校の速語圖なり雨露を凌ぐの外なるものなしとせば國家の存在も亦認むる能はざるか如し果して國家は國民の雨具たるか余其竹製なるか一貫張なるかを知らず。

二二〇、私の好き嫌い

△車屋さん

袖ふり合ふも他生の縁、乗せて輓くのは尙ほ深し、ハ、ハ、ハ、笑ひながら愛嬌タップリで「ドッコイショ」と輓き出す車屋さん

は僕は大好き、それに話など續けて輓くのは尙ほ更喜欢きじや「五間乗せてもお客はお客、乗るも乗せるも縁かいな」と云ふ調子の情けある車屋さんが大好きぢや、「ソラツ、ハ、ハ、車ジャツ……馬鹿ツと人に出會する度に大聲でドナル車屋さんは大嫌ひ、乗つた御客も顔がない。」

△奥さん

客があれば笑顔で迎へ、世間話に花を咲かせて人言云はず、賑やかに語り賑やかに笑ふ人が大好きじや、藝はあつても無き振り客のある間は猫さへ打たぬと云ふ奥さんが大好きじや、貴婦人ぶつて智者ぶつて孔雀の様に羽根ひろげ高く止まつて動かぬ人は私しやいや。夫れは扱て置き又家の仕事の閑隙には子供集めて裁ち縫ひや、

昔話しをする人はこよなく僕の慕ふ人。
愛想よく人事云はず慈悲ふかく

下婢あはれむ人ぞゆかしき

△書生さん

形ちの奇を好む書生さんは否である肩を怒らしたり、大きな杖を持つたりして、犬に遇へばケンと云つて叩き猫に遇へばニヤンと云つてオドス書生は大嫌ひ、又時々人の分らぬ英語をヒチャクツテ豪がる者は尙ほ嫌ひ學生ぶらすに温順しくベスポールよりは柔道に、ロンテンスよりは撃劍に精出す者が私しや好き。

△食べ物

牛肉と鶏と米の飯が一番好きで、飴も好きである、學校では飴先生と云はれ此の頃は又社の採字小僧連中から飴先生と言はれ

る様になつた。牛肉に飴を入れても好し鶏飴は尙ほ甘い、あゝ、涎が出る。

△女學生さん

髪かみの結ゆひ方かたは二百三高地よりはズツト低ひく、て余り饒舌じやべらぬ人が好きである、じやからと云つて又黙もくつて膨はれて居る人は嫌やである、袴はかまは男の様に尻しりの先さきに着きないで少しは上うへに着きた方が好きである。

又人と道みちで出會であした時ウツムイテ女らしくして通る人は慕したはしいが殊更とほに傘かさで顔かほを隠かくして通る人は余り人を見限みかぎつた仕方しつぽうで氣持もちがわるい。

それから一番嫌きらなのは道中みちなかで英語の本を見るもの、衆人しゆじんの中で自然主義しぜんしゆぎや女權擴張論ぢゆけんくわくちやうろんを振り廻まわす者である尙是れを一口くちに云

ふと、どこまでも女らしい女が好きで男らしい女は嫌である。

△下女どん

井戸端で虱を捕つたり、屁を放つたり、痒い所を搔いたりする下女どんは大嫌ひ、又お嬢さんぶつて氣取る下女どんも大嫌ひ、化粧べんつけてナヨナヨと女郎の様な尚ほ嫌ひ、尻が軽うてハイ〜と聲に應じて立ち廻る愛嬌者が私しや好き。

△花と鳥

鳥で一番好いたのは鳩で、花で一番好いたのは櫻である、鳩は顔立がやさしくて歩む姿のしほらしいのが好きである又櫻は暖かでありながら、飽かれぬ先きに散るが好き。又一番嫌いなのは機嫌狂言の七面鳥で松も梅も嫌やではないが冷めたい所が私しや嫌や、

二二二、涼み日記の一節

△蟬

蟬の聲はやかましけれども無邪氣にして子供らしき所あり故に子供に追はれて終日木々を逃げまはる。奥山の蟬は此世は「ミンミン」と鳴き村里の蟬は「ゼヒゼヒ」此の世を改良せよと鳴く、蟬の聲にも誠あり世の人むだにな聞きすぎぞ。

△時鳥

泣き過ぎて鶴や鶯に笑はるる嫌ひはあれども真心からの聲なれば誰れも是れをなみするものなし、否却つてこれに哀れを寄するは是れぞ誠のあればなるべし、泣けよ泣け泣け時鳥赤き血潮のつくるまでよし世の人は笑ふとも。

△朝顔

朝顔は女らし殊に竹に縫りて立つ所恰も女の男によりて世に立つが如し。而かも其を憂ひとせず自然の儘に咲いてはしほむしほらしさ殊に夫の朝寝する度に、しかめ顔して戒むるは真に賢き婦人とは云はん。

△蚊

蚊こそ真に哀れなる物なれ、蚊が其子子にてある頃は蚊になるまでの浮き沈みと慰めらるれども蚊に成りすませば又忽ち烟にも燻べらる人情の轉變是れにても聊か悟りぬべし、蚊や蚊や吾れ汝に善き事教へん若し今より燻べらるる事あらば必ず主人を連れ出づる迄己れも出づる事勿れ。

二二二二、男も悪いが女も悪い

男も悪いし女も悪い、考へても御覽候へ、今の様に男が妾を蓋

へたり娼妓に戯れたりしながら一家の真正否な夫婦間の真正が保たれたものでせうか、而かも内に歸れば知らぬ顔して夫のニセ權威をふりまくるのである形こそ一夫一婦の制であるが實は一夫多妻を實行して居るのだ、是れには男もヨモヤ申譯があるまいがな、又女も女である、負けると云ふ事が女の主徳であるといふ事はチツトも御存知がなうて、やれドウノ、それコウノと我を立て、泡ふきて夫にツカミカカル、是れが抑も女の務めか知ら、夫外に亂れ妻内に正義を説くとは現今の家庭ではあるまいか、男も女も胸に手をあて、よく考へて御覽候へ、一家と云ふものは、女が負けて居る所に和合が出来夫が權威をフリマカス所に樂しみがあるのではありませんか而かも夫が身を正しうすると云ふ事が其一大根本ではありませんか。

二二三、春心

昨日今日の長閑けさに心も自づから春めきて思はず筆を手にとりぬ。

一本咲ける庭の菜の花には何處より飛び來にけん黄色の蝶のひとつがひ舞ふては止まり止まりては舞ふあな心地よの春の日や蝶よ舞へ舞へ雲雀ようたへ

富士に夕日のしづむまで

昔より春風は人を和かにし和氣萬物を育すと言ひ春の心あれば百福自づから集ると歌ふ、げに嬉しきは春也げに樂しきは霞たなびく長閑けき春の日和なりけり。

雲雀あがる聲も聞えて山畑の
麥生長閑に春風ぞふく

二三四、歲晚小品

酒のめばいつしか心春めきて

借錢とりもうぐひすの聲

酒は世の中の喜神也、時には酒に吞まるる馬鹿者もあれども多くは酒を飲みて心を洗ひ邪心を酒ける也。又酒は榮えの約にて酔えば笑ひ榮ゆるの義なりと云ふ、莊子曰はずや飲酒は樂みを以て主と爲すと此の心を以て酒を飲めば酒に吞まるることなき也。

酒は千杯飲め湯釜でわかせ
下戸の立てたる藏はない

◎ 年の暮れに咲くビハの花ほど世に哀れなる者はなし、他の花に

後れて咲くが抑々の起りにはあれども、北風寒き簀かげに咲くが又哀れの一因也。今一つは生れつきが己に何よりの不運也、梅の如く香ひもなく櫻の如き艶容もなし、只どこまでも飾らずして無骨也。若し三四月の頃に咲かば桃と同じく節句の餅も戴くを得べく、櫻と共に咲かば花見の宴にも侍るを得べし。さは云へ是れをビハより見れば賑かなる梅や櫻の仲間には彼も聊か出づるを恥づるなるべし。

◎ 死んだ鴨二三軒飛ぶ年の暮れ、死んだ鴨の飛ぶ筈はなけれども、歳暮に貰つた鴨を又歳暮にやり其れから其れへと遣り配れば、四五軒位はとびまはる債鬼狂ひまはる師走の空貧世帯を持てる妻の心慰ばれていと哀れあり。

大晦日にひるねして人に呼び起されて、金の利子受取る位になれば嬉しけれども今では却つて首を取らるる恐れあり、油断せぬ始末の花が暮れに咲くと昔の人は教へたれども、油断勝ちなる身には花も咲かず蓄も見えず、悲しけれども枯木に鳥の夢計りなり。

二二五、東京漫録

△江戸ッ兒と東京ッ兒

江戸は東京となり、將軍様の御膝元は輦轂の下になり、生粹の江戸兒は北海道に於けるアイヌさながら追々に其の影を没して、田舎者の雑種東京ッ兒の幅を利かす時代とはなれり、昔の江戸ッ兒は、宵越の金は持たずと放言し、義を見ては水火も厭はず、生命を投げ出して難さを助くる一片の俠氣燃ゆるが如き

ものありき、されどその東京ッ兒は轉んでも只は起さず、黄金の爲めには義理も人情もあつたものにあらず、權威の前には叩頭百拜、主義も節操も利益のためには捨て、顧みざるの比々皆然かりあゝ東京ッ兒と江戸ッ兒：時人は何れの精神を學ばんとするか。

△捨る文明

「東京と云ふ所は大した所だ、何でも捨りさへすれば用が足りる、電車も捨れば動く、水道も栓を捨れば出る、電氣も瓦斯も、電話も皆捨れば思ふ通りになる實に大したものだ」と、之遙に九州の山奥より見物に來し某老婆の東京視察思想談なりとさく、あゝ捨る文明！捨る文明！乞ふ一笑話柄として輕々に看過する勿れ、其間に意味深遠ある或物の潜めるにあらずや。

△二重橋

大内山の松の緑いよ濃く、九重の天紫雲常に漂ふ此のあした二重橋畔に跪いて、畏多くも一天萬乗の大君の宮居し玉ふ邊を拜しまつれば、森嚴の氣敬度の情自づと襟を正し頸の垂るゝを覺ゆべし、古人は伊勢太廟に詣で、「何ものゝおはしますかは知らねども、忝けなさに涙こぼるゝ」と詠じたりときく我等は今二重橋畔に拜跪して、「大君の宮居の前に額けばたゞありがたさに涙こぼるゝ」の感なくんばあらず、見よ、玉垣に榮ゆる松吹く風の音にも、千秋の調、萬歳の樂を奏しつゝあるにあらずや。

△日比谷公園

日比谷公園は帝都の中央宮城の近くにある理想的の一大公園に

して日本のハイドパークを以て目せらる、春夏秋冬内外の珍草名花常に絶えず、園内廣莫、築山あり、噴水あり、池あり、亭あり、音楽堂あり、運動場あり、圖書館あり、休憩所あり、設備整然、殆ど至れり盡せりの觀あり、故あるかな、政府は常に此公園を以て外來貴賓を接待する歡迎場たらしめ又毎年高貴の御臨場を乞ふて赤十字社總會の會場たらしむ、日比谷公園にして若し靈あらば、其の光榮に感泣せん、但し四五十年以來時局に慨する市民が、國民大會の會場たらしめ、耽溺派の若き青年男女の密會所に充つるは聊か日比谷公園の有難迷惑にする所なるべし、

△帝國議事堂

立法議政府たる貴衆兩議院は共に日比谷原頭内幸町にあり外觀

の美堂々たる泰西諸國の夫れに比肩すべくもあらねど、兎に角國民の選良が、毎年十一月より翌二月に至る所謂政治季節には、此一堂に會して政府當局者と共に、國事を議し律法を制するの場所たるを思へば、一種敬虔の念なきを得ず、然れども我等は疑ふ、三百有餘名の衆議院議員なるものが、其識見に於て、其能力に於て其の人格に於て、果して一國の選良たる資格ありや、彼等は黄金に眩せず權威に屈せず、眞に民意を代表して國家の進運に努力しつゝありや、朝報子曰く「議事堂の建築のみは兎に角近世のロネツサン式なり、されど國事を議する議員の頭腦は概ね十六世紀の古典好なり」と又某皮肉子曰く「現在の國會は衆議院にあらざ衆愚院なり、醜議員なり、貴族院にあらざ、氣樂院なり、氣取員なり」と言聊か穩當ならざるも近時彼等の

言動に徴すれば、我等之を否認するの勇氣なきを悲しむものなり。

△帝國劇場と警視廳

日比谷公園に近く、宮城の御濠に面して、壯嚴なる二大建物あり、一を帝國劇場とし一を警視廳となす、建築學の智識なき我等は其果して何式に屬するか知らねども、白堊洋館の帝劇と、頑丈なる煉瓦造りの警視廳と並び建てるさへ對照の妙なるに、歡樂管絃の響に和して警叱訊問の聲あり、美裝談笑の紳士貴女に對して帶劍の警官繩付の囚人あり、即ち地獄と極樂とを最も露骨に具體的に表現せるの觀あり、尙見よ、帝劇の屋上、娼然として微笑せる藝術の女神と、警視廳の左側、嚴然として直立せる川路大警視の銅像を之何をか意見する？あ、何等のアイ

ロニード、何等のコントラストぞ。

△上野と淺草

明治文壇の奇傑齋藤綠雨曰く「上野は行き止りの公園なり、淺草は通り抜けの公園なり」と成程上野の奥は卒塔婆壘々たる谷中の墓地なり淺草の奥には解語の花咲き匂ふ不夜城の吉原あり綠雨の文言外の妙味あるを覺ゆ。

老樹鬱蒼、靜寂深閑は上野の特色なり、商售櫛比、群衆雜踏は淺草の特色なり、上野に東照宮を祠り、西郷南洲の像立てるはふさはしく、淺草に觀世音を祭り、瓜生岩女の像はその處を得たり、動物園博物館は必ず上野のものなるが如く、活動寫眞、花屋敷の類は又必ず淺草のものたらざる可らず、上野は腕を扼して詩を吟ずるによく、淺草は尻を捲つて浪花節を聞くに妙

なり、上野は君僕の公園なり、浅草はペランメー、何デイの公園なり、上野は紳士の公園なり、浅草は熊公八公の公園なり、上野を奥ゆかしく貴婦人の面影ありとすれば、浅草はけばくしき茶屋女の容姿ありと云ふを得べし、而して上野公園は博覽會を連想せしめ、浅草公園は白首姫を直覺す、但しその何の故たるかを知らず。

△國技館

二州橋畔、江東の曉霧を破りてひびく鑿々の音は江戸八百八街の好角家をして如何に血を湧かしめ骨を鳴らせしぞ、而して其の東西兩力士が龍鬪虎擊の壯觀は、如何に觀客をして手に汗を握らしめ國民の士氣を鼓舞せしぞ、げに相撲は我國古來の最も勇壯なる武士的遊戯なりしなり。

而して今や其の回向院は名も姿も改めて鐵骨洋裝の國技館となりその形式體裁に至りては殆ど完備せしと雖も、その實力精神に於て頗る之に伴はざるものあるは識者の大に遺憾とする所なりとす、之れ社會の罪か、將た相撲道の頽廢か我之を知らずと雖も、情意投合、妥協苟安等が政治家の腐敗を意味するが如く、八百長、馴合ひ等も亦力士の墮落を意味するものと云はざる可らず。

相撲は飽までも實力の競争なり正々堂々武士的態度を以て勝敗を決するを要す、かくてこそ眞に日本の男子的國技なり又國技館の名に反かすと云ふを得べし。

二二六、東都警察官練習所に在る友人に送る文
四月中旬一友より

春暖かに氣閑なり、錦地昨今の景情果して如何、墨堤十里櫻雲
 霰霰の壯觀、東臺一圓、落花繽紛の美觀さては先般開催されし
 と聞く、不忍池畔大正博の般賑雑踏、蓋し豫想の外にあらん、
 而して足下は今や撰ばれて學に警官練習所けい官れんしんしよにあり、朝に夕に此
 壯觀美觀を擅せんにす、余は遙に東天を望んで羨望欣怨の情に堪え
 ざるなり、
 六ヶ月の練習決して長からず、半歳の修學又深さを望む可らず
 と雖も、足下の英資を以て、足下の精力を以て其の實地に見聞
 し、その實際に遭會して修得し得る實社會の活學問は、萬卷の
 書よりも能く、百年の學よりも貴き、偉大豊富なる効果あらん
 而して足下は現に其の位置、その境遇に會せり、あゝ希望と光
 明とにみち充てる足下の前途は、それ洋々乎として春海の如き

か。
 然れども足下よ、濫りに東都の風物に憧憬し、京洛の壯嚴に眩
 惑さる勿れ、輝く楯の半面のみを見て他の然らざる半面を忘る
 ゝは愚者の常なり、徒らに皮相の文明に耽溺して闇黒の裏面に
 戰慄せざるは、痴人の常なり、余は足下に向つて此言をなす將
 に釋迦に説法の譏を免るゝ可らざるを知ると雖も、今聊か卑見
 を陳じて足下の座右に呈せんとす、乞ふ友を思ふ一片の婆心幸
 に足下學窓の寸閑を偷みて一讀の榮を得ば余の幸甚之に過ぎ
 ず。
 足下よ、東都の十字街に立ちて先づ足下の眼底に映じ來るもの
 は何ぞ、或は二階、或は三階、或は白堊洋館或は石造、煉瓦造
 りの大廈高樓、櫛の齒を比ぶるが如きに一驚を喫せむ、之れ地方

小都市に於ては到底見るを得ざるの壯觀なればなり、而して其中には官衙公署あり、ホテル病院あり、學校教會あり、劇場旗亭あり、官邸私邸あり、八百八街、到る所天に聳ゆるを見む、然れども足下よ、此大厦高樓の中必ずしも善事のみ行はるゝにあらず否寧ろ百鬼夜行の醜怪事の潜在すること多きを忘る可らず、試に見よ、日比谷原頭に於ける議政壇上の近況を、國民の代表者と自稱し一國の選良を以て自任する代議士の言動を、果して國會は立憲政體の眞隨を發揮しつゝありや、議員は國民同胞の意志を完全に代表し實現しつゝありや、或皮肉先生曰く、議事堂は粗末なりと雖も兎に角近世のルネッサン式建築あり、されど國政を議する選良の頭腦は依然として十六世紀の古典的なりと、余不幸山河數百里邊僻の地にあり、其實否を知るを得

ざるも、足下今や政治の中心地であり定めし帝國議會傍聽の機會も之ありしならん、然らば即ち高見果して如何?
更に余は、從來聞知したる一事を披瀝して足下の判断を仰がんとす、余は一國の政治は公官署、若くは立法院に於て行はれ議せらるゝものと確信せしに、何ぞ計らん、重要機密の政務は、多く爛燈影暗き待合の四疊半裡に於て行はると、咄々何等の怪事ぞ、余は日本國民として斯の如き事實を信じ難しと雖も、近時政界の腐敗、官吏の墮落、コンミツション、收賄贈賄等の醜聞喧しきを見れば、又幾分の疑念なき能はず、恰もよし足下今や都門にありて這般の消息を知ること詳ならん、願くばその警眼を以て闇黒の秘密を洞觀し以て余の疑念を一掃せしめよ。
尙最近の事象としては、過日々比谷公園に於ける國民大會の群

衆が、議院を包圍して騷擾の兆ありし際、東都の警官が拔劍して新聞記者其他を傷害せりと云ふ所謂警官拔劍問題及び四百餘名の良民を引致監禁せりてふ所謂人權蹂躪問題の實情真相や如何予深く之を信せずと雖ども誠に問ふ處あるのみ金殿玉樓に棲み、酒池肉林に飽き、出るに馬車自動車あり、入れば即ち妻妾媚を呈し笑を浮べて之を迎ふ、奢豪王侯を凌ぐ成金の堂々たる邸宅の後には、零叮落魄、着るに衣なく食ふに金なく、漸く檻樓を纏ひ、殘飯を嚙りて其の日々の露命をつなぐ豚小屋に劣れる無慘の貧民窟ある、之れ東都の半面なりとさく見よ歌舞管絃の響と怒號惡罵の叫び歡樂の囁きと生活難の聲あゝ何等の對照ぞ、何等のコントラストぞ、之れ果して健全なる社會の發達と云ふを得べきか、足下の得意とする社會學研究

の好資料は、都門の地、隨時隨所に展開せり、足下幸に例の警察眼を鋭敏にして他日の用に供せよ。如斯數え來れば東都社會の各階級、各事象を通じて、總て足下の爲めには活ける學問なり、活ける教科書なり、足下よ、何物にも囚はるゝ所なく、常に身を第三者の高きにおき、冷靜に之を客觀し之を公平に批判し以て、自己將來の資料たり參考たらしめよ。余は繰返して云ふ、足下の前途は多望多幸なり、洋々たる春海に西帆の風を孕みて走る輕舟の如し、然れども、時に風雨なきを保せず時に怒濤なきを期し難し、若し夫れ萬一如斯場合に際會するも、あわてず、騒がず、奮然厥起、之を突破し之を航進して目的の彼岸に着するの道如何一に堅忍不拔の修養を積むに

あり、二には發足首途の第一歩を誤らざるにあり、而して足下は恰も、その發足首途の第一歩に上る、迷はず惑はず、只一直線に驀進猛進せよ。
余は本書を茲に擱筆せんとするに當り尙特に足下に告げざる可らざるの一事あり、そは足下の最愛なる令閨令息の消息なり、足下都に上りてより既に三ヶ月、まだ日長からざるも、令閨令息は淋しく冷たき家庭に一日千秋の思を以て足下の飾衣歸郷の日を屈指して待ちつゝあり、夫婦親子の情誠に爾かあるべしと余は同情の涙なきを得ざると共に、余等同僚も亦足下が優秀拔群の成績を以て目出度修業の吉報に接せんことを神佛に祈念して待ちつゝあり。
足下よ、願くば自重自愛、余等の期待を諒として奮勵一番最後

の月桂冠を得んことに努力せよ、敢て至囑す。

二二七、母に代りて東京の女學生に與ふるの書

其一

母が可愛ゆき御身を遠く離して東京に遊ばせ申すは學びの道を踏み分けて聽ては賢き婦人となり家の爲め國の爲め又一つには御身の行く先きに良縁あらんことを願ふてに候決して世の流を汲みて御身を虚榮心に富める今時のハデヤカなる婦人となさんか爲めには無之候斯くの如きことは出立の當時己に細々と申し上げたる事にて今更申すまでもなきことには候へ共此の頃の新聞を拜見いたし聊か胸に浮びたる事のこれ有り候まゝ拙筆を取り申し候間御隙の折是非御一讀下され度候母が朝夕心に念じ候事數多く候へ共先づ片時も胸を離れざるものは身を謹むこと

の一事に候先達も○○生と○○學校生との關係をチラと新聞にて拜見いたし少からず胸を傷め申し候元より御身は小學校時代より他の生徒の模範とまで歌はれ村の校長も末頼もしき娘とまで云はれたる事のこれあり候へば其覺悟は元よりの事とは存じ候へ共男女の關係は又誤り易きものに候へば念の爲め申上げ候。

男に對して半分は好み半分は嫌ふ位の心掛が肝要かと存じ申候或人の戀人に對しては不仁者も仁者となり不徳漢も義人となるものに候とは誠に眞を穿ちたる言葉かと存じ申候元より總ての男を疑へとはこれなく候へ共兎角世の中の人の口先は心とは全くの他人なることを得と御承知下され度候殊に男の女に對する時と女の男に對する時とは互に飾りたる上の義理多く候へば

それを眞情よりの仕打などと思へば身を過つのは始に候又十分學問知識を備へ將來見込あるキリツとしたる人格ある學生は連も女などに目くれてミダラなる行爲は致すまじく候思へば先達の紙上にて拜見いたしたる人々は我か身の將來に不幸の種子を蒔きたると同じに候殊に掲げられたる方々の御兩親の心中を推し計り候へば直ちに御身の事にまで思ひ及び涙が先きに湧き出で申候是れも子を思ふ親の心からにて候。尙此度は序でを以て母が女に對する平生の意見を二つ三つ申上げ候間これも御熟讀の上御氣に召さぬ所これあり候はば御遠慮なくば思召しの旨御認め御送り下され度候。

其二
女らしく、白隠禪師の申し置かれたる、らしくと云ふ事を呉れ

呉れも御忘れこれなき様願ひ奉り候實に女は女らしくするが人の尊敬を受くるもとかと存じ申し候口が達者で才があり議論などでは時々男を押し込める位にあるはえらき様に候へども是れとて心あるものより見れば却つて笑ふものに候どこまでも母は御身を女らしく育て男に對してはよし己れ正しくとも負けて居る位のしほらしき女に嫉けたく候〇〇〇子女史や〇〇〇〇〇〇女子の如きは母が露程も望む所にはこれなく候。自由結婚をする男女は又自由離婚をする覺悟を持つべきもの候よく考へ候へば自由結婚は動もすれば盲目的結婚に陥る様存せられ申候只今の女學生には自由結婚など人前も憚らず申さるゝ方もこれ有り候へ共あれば如何なものかと存じ申候是れにつきては少々をかしき様に候へ共御身の御意見も承り度候、

然し母はこの自由結婚にはどこまでも不賛成に御座候而かも母が爲にはあらずして御身の爲に不賛成に御座候其理由は前きに申し上げたる通り盲目的なるが其一つに候冷かなる他人の觀察なき爲後より無理の出づるが其二つに候然し斯くの如き冷かなる言葉は若き男女の耳には露程も這入るものには是れなく候去れど斯の如き事は御身には不要なる言葉かと存じ申し候隠くさず申し候へば母は御身が兼てよりのしほらしき行に嬉し涙を流すこともこれ有り候。獨身主義を唱ふる女は我が儘勝手手の女に候獨身女の議論と立派なる家庭を作られたる賢婦人の議論とを御比較に相成其説の如何なる所に相違あるかを御悟り下され度候利巧ぶることが已に利巧ならざるが如く獨身主義を唱ふる女は已に其精神に於て男

に連れ添ふ事の出来ぬ女に候、尤も其中には道理あるものもこれあるべく候へ共一般より申し候へば世の識者も絶対に賛成は致すまじく候元より女とても何處までも男子に屈服する必要はこれなく候へ共夫婦の道は女が負けて居る所に和合が出来一家の治りもつくものに候又一歩進めて申し候へば己れの正しき時にも尙勝を夫に譲りて負けて居るが如何にも女らしき女にはあらざるなきかと存じ申し候。

其三

着物は絹物ばかり送り度は山々に候へ共これとて人格あるものより見ればよき着物着くるもの程心のキリツとしたる女はこれなく候かくさす申し候へば化粧などつけて身を飾るは一つは己れの心にミダラなる考への存する證據に御座候殊に近頃東京に

は厚化粧を施すものこれあり候由これは誠に日本の祖先にも似ぬ悪風かと存じ申候去れど斯くの如きことは御身朝夕御接近の諸先生や御地のキリツとしたる御婦人方を御覽下され夫れを手本に御見習ひ下され度候。

學科に對しては、決して輕重はこれなく候へ共わけて家政學には御心を御注ぎ下され度候殊に育兒裁縫料理其他家婦として必要の學科には一心に御奮勵下され度候、實に將來一家を立て夫を安んせしむるには英語音樂などよりは此家政學が大切かと存じ申し候、これは特別の例に候へ共母が同窓の友にして英語音樂などには精通致し子供に着物一枚縫ふ事の出来ぬ方もこれあり候これは全く女の本分を忘れたる御方かと存じ申し候。役員たらんとする考へ、女學校を終へて將來は役員にならん

どとは露程も御考へこれなき様願ひたてまつり候最も郷里に歸りて村の小學校などに通ふことは父も母も望むところにて御座候去れど一生を獨身にて教育に盡すなどと當世向きの片輪主義は許す所にはこれなく候、殊に官衙に出でて婦人に關係なき事務に従事し一生を終らんなどは毛頭も考へこれなき様これも前以て願上げ候。

尙又世に出でたる後も婦人會の會長にならん、慈善音樂會の會長にならんなどと表だけハデなる役員などには御目をつけられぬ様これも御願申上候、實際悪く申し候へば何々會長。何々會員などとカケマワル方には割合に我が一家の事には手の届かぬ方多き様存じ申候然し母も一時は左様な事にも手を出し申し候これは母が虚榮心に馳られたる故にて候。

次に雀の如き女は誠に卑むべき女に候元より無邪氣にして賑かに語ることは執念深くして無口なる人よりは人に可愛からるるに相違これなく候へ共動もすれば云ひ過ぎて人の悔りを受くることこれ有り候是れは餘り學者ぶりたる云ひ様に候へ共謹むと云ふ字は言はんとして口先きまで出でたる事を再び省察して云つてよいか悪いかを考ふるが其本義に候去ればとて高く止まりて孔雀のやうにキドレとは、これなく候、只心に思ふて舌に話す位の謹み深き人になれとの心に候。

其四

又世の中には女の身を忘れて男女同權論や女子參政權などを聲高く申さるる方も有之候へ共あれは此處に申上ぐる程の事にはこれなく候。又雜誌や新聞紙上などにて男女同權論や戀愛真正

論などを説かるる方々を見て直ちに己が味方のやうに御思し召され候らはばまことに行き先きは危きことと存じ申候、つつまず申し上げ候へば新聞雑誌などにて色々女に味方さるる方々は却つて妾などを蓄へてわが妻には憂き目を見せらるる人多き由母は承り申し候、ことに自然主義などと母は只聞いてさへ恐しき様存じ申し候又今の立派なる博士達には「女丈夫の手によりて育てらるる女の將來は誠に不運に候」となげかるる方も有之候まことに此方々の仰せらるる通り總て世の中の事は一般的と云ふことか大本かと存じ申し候、若し女の方々がすべて政事などに身を委ねられ候らはば世の中は如何になり行く事かと存じ申候思へば世の中の人女子の小さき俗事に誠あることを御忘れ遊ばさるる様存じ申候これは誠に世の中の爲に悲しむべき

事に御座候、夫れ故御身はどこまでも、女は内と云ふ事を確と心にきざみつけ下され度候、木にすれば女は根にて、水鳥にすれば其足にて候、梅も櫻も根が土中に隠れて働いてこそ香ひある花も咲き出づるものに候又水鳥のやすらかに泳ぎまはるも隠れたる足のおかげに御座候、夫れを悟らずして根と花とを一樣に仕様などとはてふど鼻を目の上につけ様とすると同じ事と存じ申し候。尚二つ三つ申上げ度事有之書き續け居り候ところ父上様に見つけられ「娘には餘り言ひ過ぎたる言葉ならずや」と小言を申され候間ここに筆をおさめ申し候然れど母は只御身の行く先きに幸あれかしとの一念より、つゝまらず申し上げたるものに候へば何卒御許し下され度候、母は此度の學年末休暇の御歸りを何よ

りの樂みに待ち居申し候、何時もながらの母が口ぐせには候へ共本年も美事上席を以て御及第遊ばされ姉上様達より御褒美をただかるる様神かけて祈り奉り候し。

二三八、春興雅記

(一) 春

春は暖なり、人にすれば情深き人なるべし、其氣和かにして人の肌を犯すことなし、かるが故に草木は其恵みによりて香ばしき花を開き、鳥は喜びて歌ひ蝶は其恵みに、あまへて舞ふ、そはともあれ彼の大を以て誇り強を以てほこる、わだつみの神さへ尙春には、なづけるにや荒き心もあらはさず、徳の至りなり。

(二) 梅

梅は寒き花也、やせたる僧と棋を圍みつつ見るべしとは云ひ得

て面白し、梅は女にすれば女丈夫也、一寸手出して折り取るべからず。

梅に鶯よく見て止まれ

花のよい木にや實はならぬ

(三) 櫻

櫻は暖き花也、若き友と歌ひ興じつゝ見るべし、手折るに易しこれには誰れも異存はなかるべし、去れど實のなきが玉にきづなるべし、今櫻を女とすれば梅は慥に男なるべし。

梅と櫻とちぎりしなればよそに吹かせん朝嵐

(四) 春の月

角立ぬのが風情なれ朧月、人も斯く有りたきもの也、秋の月は

餘りに角立ちて餘りに清らか也、澄み過ぎては魚も水にすまず止めよ止めよ云ふを止めよ、汚れたる、この世に於て吾れ獨り醒めたりと。

(五) 柳

柳は角立たぬが其美の一也、静にして飾らざるは其美の二也、外柔内剛は美の三也、高うして高ぶらざるは美の四也、今之を合せ評すれば柳はどこまでも君子的也、世の人如何にや。

(六) 蝶々

蝶はどこまでも女也しかも貞操ある女にはあらずして浮きたる女也。花を便りに狂ひまはるみだらなる女也、身に、相應しからぬ「フリソデ」をつけて、なよなよと花から花を飛びまはる様は、どこまでも、酌婦的也、藝妓的也、花を尋ねながら花を

ばよそに戀人と花下に眠むるはどこまでも姪婦也、賣春婦也。蝶の無邪氣なる姿を以て斯の如き心を有す、明治の青年男子聊か内に省みる所あつて可ならんか。

(七) 藤

藤は何となく、おぼつかなし色の薄さが爲めなるべし、藤ならずとも紫色は總て愛相なし赤のにぎやかなるには遠く及ばず、愈々咲いて愈々下るは藤の特色也、去れど人に縋りて一人立ちの出来ぬは又藤の耻辱也、獨立の堅志なくして人に縋り人に下る吾人の手本とすべきものにあらず。

(八) 鶯

鶯の一聲に春を知り鶯の聲に一入春の長閑さを知る吾れも人も同感なるべし。

鶯は音樂學校の卒業生にやあらん眞に歌上手也、去れど雀や時鳥の如くひやみには歌はず、歌ふにも氣を張り力を入れて腹にて歌ひ、雀の如く舌音にては歌はず故に其聲なんとなくひさしまりたる心地す、眞に彼れは音樂家也。

(九) 春の雪と氷
雨霰雪や氷とへだつれど

とくれれば同じ谷川の水
つめたき冬には雪は雪也氷は氷也、とけ合ひて樂しき海に出づること知らず、哀むべき也、去れど春に遇ひては、おかしきにや互に我を折りて谷に落ち合ひ、笑ひ、さざめきつゝ下り行く、情けの前には我も立て通しがたければ也。

(十) 春と詩人

春や眞に詩材に富む、山川草木皆文也、花鳥風月皆詩也、行くとして文にあらざるはなく、聞くとして歌にあらざるはなし眞に春は詩人の寶庫也。
今この稿を終へんとするに當り試みに其一二をあげて筆を擱かんか。
人にさはらぬ春霞、しめやかにふる春の雨、長閑なる野になくひばり、罪なき、すみれ、れんげ草、かぞへ來れば心も浮き立つばかりなり。

二二九、新卒業の教習生に與ふ

(一)

署長は春の如く暖になければならぬ冬の様にもものすごい暖みのない署長は眞に統率者として不適當である、つまり、寛大なる

愛情と云ふ事が上官の一日も忘れてはならぬ至要條件である此の寛大なる愛情を備へて居る署長に引き立てられて居る部下は常に心から署長に悦服し常に心から楽しんで執務するのである、「この署長は善い署長であるこの署長は親切な署長である」と云ふ心は彼等の執務状態と事務の進行とに非常に密接なる關係を持つて居るものである。眞に愛情を動機として成り立つた訓示でなければ執務上少しも價值がないと云ふ事は特に新卒業生の心に銘すべき玉條ではなからうか。訓育は愛に始まり愛に成る。

(二二)

威嚴を以て部下に望めば部下が卑屈になるやうである、兎に角

署長はニコニコ主義が最もよいやうであるとして常に彼等に畏敬されないので、愛着される様につとむべきである、實際威嚴あるばかりの署長の訓示は静かではあるがノビノビした暖みがない愛着されて居る署長の訓授は之と反對で常に部下がイキイキして樂しげである又特に記すべきは署長ブラずして何時も彼等の無意識的過失を深く咎めぬ一事である。

(二三)

警察の目的か時代と共に推移するものとすれば、現今の世の中は少し秩序が亂れて居るから警察の目的が嚴格であると云ひたい。然し又現今の世の中は徳のある人よりは智者が成功する世の中であると思へば智識才幹のある人を作るのが教習所の目的であると云ひたいのである。

實際この目的に就いては色々説かありますが、要するに是れを個人的に解する人とこれを社會的に解する人との差がある計りであります。これに悪口を云へばこの大なる人間の目的を定義と云ふ小なる籠の中に押し込め様とした弊に陥るものであります。

ところが世の中はそんな理屈めいた學説にはトントおかまいなしでドシドシ進行してしまふのであります。そこで吾々はオカシイヨウであるが在職中は同志仲間協議をして。善い人を作るのが教習所の目的である。と極めて置いた。善い人は學者的に云へば智情意の圓滿に發達した人。時世に順應した人。公共善に向つて進む人、人格ある人、又は最大多数の最大幸福を標準として進む人と云つても少しも差支へはない。

(四)

警官は儒教と云ふ事には是非共心を傾くる必要がある、儒教が現代的で文明的で不可思議の説のないと云ふ事は現代學者の等しく唱導する所であるが實際よく考へて見ると我が國民の忠君愛國の思想はこの儒教によりて育てられたものではなからうか、我が國民の國家思想は即ちこの儒教によりて養はれたのではあるまいか或人によると儒教は古臭いとか時代後れであるとか色々講る人がありますが、それは云ふ其人が古臭くて時代後れであるのである更につけ加へて云へば其人に自發的才能が缺如して居るのである。

牛が水を飲めば乳となり蛇が水を飲めば毒となるではありませんか。又よく考へて見ると佛教は出世間的であるが儒教は世間

的である、基督教は神的であるがこの儒教は、人的である、つまりこの儒教に味のあると云ふのは佛教や基督教の如く他のオカシキ動機をかららないで人道を踏み行ふと云ふ點にあるのではなからうか。

これと同時に心すべきは、現代の科學と云ふ物が眞理を其儘裸體的に發表して憚らぬ爲め我が國民の道德、否世界の道德の根底に動搖を來し稍々もすれば危険思想の起ると云ふ事でありま

喜ぶべき警察界の一現象 (五)

この頃は研究か一歩進んで、美しき方法よりは其訓授の結果即ち成績に注意するやうになつて來ました、署長がたゞ巡廻して

其執務ぶりに満足せずして其結果に注意するやうになつて來ました。これは誠に喜ぶべき現象で研究が其根本に一歩を踏み込んだと云つてよいのであります、警察署では成績の競争考査があり署長は又時々不意に考査問題を提げて各自の成績を調ぶるやうになつて來た、そこで各自は一時ノガレの執務では逃げ先きがないやうになつて來た、一日のハデな執務に安んずることが出来ないやうになつて來た、署長もまた、あなたの部は成績がわるいこれではいけない、かねての執務にどこにか手落ちがある、あなたの部はたいへん成績がよい實に感心だと其結果を見て批評するやうになつて來た。即ち理屈は置いて實力の競争が始つた。

又一口に云ふと結果のよいのはどこかに其人の執務によい所が

あり結果の悪いのは又どこにか手の届かぬ所があるのである。
つまり俗事に誠があり奇言奇行に却つて誠のないやうな者で
「理屈を云ふ主任の受持が夫れほど成績がよくない」と云ふ所
からこんな結果論が湧き出たのであるまいか。

(一六)

群衆警戒の時間に「静にいなさい」と云はないで静かにさせる
事の出来る警官は慥にエライ警官である、由來警官は心を以て
心を化する職務であるから、知らず知らず警官の取締に注意を
惹いて、彼等が自ら襟を正す位になれば少しも効力はないの
である然るに世の中には「静かにいなさい静かにいなさい」と
叱りながら警戒をする警官もある、これは、實際この群衆が、
感動と云ふ二字の力に因つて成功するものであると云ふ事をわ

きまへぬからである、それで群衆が、感興を惹いて居る時濫り
に暴言を發するのは、今迄折角冷却して來た感情を却つて興奮
せしむる恐れがある、これは特に新卒業生の大に研究すべき問
題である。

(一七)

規則を澤山作る署長は餘りエライ署長ではない、所が現今では
どこでも署長が餘り規則を作り過ぎて而かも自ら規則負けをし
ておいでになるやうであります、是れは餘り早く人民の心を小
局に疊み込ますとするのと今一つは情と云ふ事を基本にして法
を拵らへぬからであります、そこで新署長は何時も警察は規則
で人を治るものでなくして愛を資本とした精神的職務であると
云ふ事を深く覺悟せねばならぬ。

(八) 是れは吾が身の白状であるが實際、怠慢なる態度を以て人民に望みたる時は價值のある材料をいつも殺してしまつた。夫れと同じ時に又力の無い動作が常に彼等に厭氣を與へ、簡單にして語勢ある命令が常に彼等の心を緊束して感動を與へたと云ふことである。

(九) 私には一向人民が好きませぬと云ふのは私は警察官としての資格がないと云ふ事を自白するのであります、親切に負けぬ人にならない様に真心から彼等を愛したならどうして人民が縫がらないで置きませう。眞の愛があれば叩いても叱つても少しも取締上かまはない叩

く時は親が子を打つ様に掌の中に愛と云ふ塊を握りながらウンと叩けばよいのである、然し口先きで人民を可愛がり其座計りで人民を可愛がる人が彼等を叩いたらソレコソたいへんである。

(十) 要點を精確に、要點を精確に、と云ふ言葉は新卒業生の常に警察界に立ちて獨語すべき者である、一事項の要點即ち主眼點以外に論及せぬよし論及しても其主眼點を精確にする補助的枝葉の説明に過ぎない様にすると云ふ事は誠に肝要な事である又それと同時に、一口ですむ所に二口を費さぬ事、説明せずして分る事を説明せぬ事、即ち是れが説諭の上手と下手との分かる所、又時間を有効に費す所以である、然し人は皆口ほどは出

來ぬ者で斯く云ふ予は、ほんにゼロのゼロで在職中は何時も上長から御目玉を頂戴したのだ。

(十一)

白露の戦争に我が日本が大捷を博したのは準備が整つて居たからである落度のない用意が出来て居たからである而かも夫れに今一つ大和魂と云ふ盛んな意氣が加つて居たのである警察事務は其通り準備が必要である、現今の博士連中にも一時間の講話の爲に二三時間の準備をする人がある況んや………
一の過失なき人は遂に何事をも爲し得ざるの人也と云ふ言葉を警察に持つて来てよし一二の過失はあつても意氣を壯にして譴責があつてもドシドシ遣つて見ると云ふ覺悟が最も必要である。

(十一)

一般的と云ふ考へは警官にとつて最も大切な事であり、例へば動機が善であれば手段はドウデモかまわぬ結果が善であれば動機はドウデモかまわぬと云ふ様な考へは最も警官の謹むべき事である、即ち警官の取るべきは動機も善で手段も善で結果も善（即ち一般的）なるものをとるべきである今之を犯罪に就いて云へば取調の形式に於ては最も多く世の中に行はれて居る形式をとり處分の法方に於ては又最も廣く世間に慣用されて居る筆法を標準として調ふると云ふ考へを持つべき者であります。これを一口に云ふと警官は社會的な至極穩健な思想を持てと云ふのであります。
そこで私は新卒業生に向つて是非倫理學を研究せられん事を勸

むるのであります、倫理學が國民に其目的を與ふるものなることは云ふ迄もなく此の倫理學を讀めば、調和的、一般的公共善、道徳の標準と云ふ様な事がよく頭に泌み込ひて來ます又夫れと同時に必ず人は人の中に生活せざるべからず、人を離れては人ではないと云ふやうな社會的な考へが起つて來るのであります水戸光圀公が許由が耳を洗ふ圖に、題して
耳を洗ふ心の水は清けれど
流れは汲まじ世を救ふ身は

と歌はれた此の心はとつて以て警察官の心としたいのであります。要するに警察官は仙人的になつて獨天狗的思想を持たないで常に一般的な社會的な至極穩健な思想を持つと云ふ事が大切であります。

ります。

最終の希望

愛相あり且つ和氣熱心にして研究心に富み、幾分頑固にして動かぬ堅き精神を有し、職務に於ては常に其結果を驗して自ら標的を作り如何に人の讚辞を受くるも結果悪るければ自ら心に悲しみ、而かも常に口と心と他人ならざらん事を心掛くべきこと即ち是れ。

人 情 百 話 終

大正三年五月三十日印刷
大正三年六月十五日發行



不許
複製

著者

發行者兼
印刷者

定價 金貳拾錢

郵稅金四錢

有村良四郎

東京市芝區愛宕町二丁目拾四番地

日本警察新聞社代表者

中村彌助

東京市芝區愛宕町二丁目拾四番地

日本警察新聞社

電話芝四八八四番
振替口座東京八一五七番

發行所

寶珠丸

日本醫藥雜誌

辨

海

林

不

海

百

大正三年六月十日

...



174

880